

浅川扇状地遺跡群

中越遺跡(2)

徳間番場遺跡(2)

中越一丁目ブレインマンション新築工事 および
東邦ピュアタウン徳間3号地駐車場等造成工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年3月

長野市教育委員会

序

埋蔵文化財は、地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない貴重な財産であります。

近年、人々は社会の変化を受けて環境や景観に配慮した生活空間を願い求め、地域の自然・歴史・文化を具体的に示す各種の文化財への関心・期待は確実に高まっています。

ここに長野市の埋蔵文化財第148集として刊行いたします本書には、2件の民間開発行為に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、浅川扇状地遺跡群に属する「中越遺跡」「徳間番場遺跡」として詳しくまとめられています。発掘調査では、弥生時代から奈良時代までの竪穴住居跡や土坑・溝などが検出されています。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました開発事業者の皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2017年（平成29）3月

長野市教育委員会

教育長 近藤 守

目次

序
目次

浅川扇状地遺跡群 中越遺跡 (2)

例言・凡例	2	第3節 いわゆる「国鉄貨物基地遺跡」と「国鉄車両基地遺跡」について	8
第1章 調査の経緯	3	第III章 調査成果	11
第1節 調査の契機と事務経過	3	第1節 調査概要	11
第2節 調査の経過と方法	4	第2節 遺構と遺物	13
第3節 調査体制	5	第IV章 まとめ	22
第II章 遺跡の立地と環境	6	写真図版	23
第1節 遺跡の立地	6		
第2節 周辺の遺跡	6		

【挿 図】

図1 調査地位置図	3	図12 S B 2 出土遺物実測図	14
図2 作業風景	4	図13 S T 1・S T 2 実測図	15
図3 調査区位置図	4	図14 S T 3・S T 4 実測図	16
図4 周辺遺跡位置図	7	図15 S K 1 実測図	17
図5 国鉄貨物基地遺跡・国鉄車両基地遺跡の位置と範囲	8	図16 S K 1 出土遺物実測図	17
図6 北長野貨物駅遺跡・国鉄車両基地遺跡の位置	10	図17 S K 5 実測図	18
図7 基本層序	11	図18 S K 6 実測図	18
図8 調査区全体図	11	図19 S D 1・S D 2・S D 3・S D 4 実測図	19
図9 S B 1 実測図	13	図20 S D 3 出土遺物実測図	20
図10 S B 1 出土遺物実測図	13	図21 遺構外出土遺物実測図	21
図11 S B 2 実測図	14	図22 中越遺跡の想定範囲	22

【表】

表1 中越地点遺跡と古野地点遺跡の記載の変化	9	表3 出土土器観察表	21
表2 遺構一覧表	12		

浅川扇状地遺跡群 徳間番場遺跡 (2)

例言・凡例	28	第2節 歴史的環境	32
第I章 調査の経過	29	第III章 調査成果	35
第1節 調査の契機と事務経過	29	第1節 調査概要	35
第2節 調査日誌抄	30	第2節 遺構覆土の種類	37
第3節 調査体制	30	第3節 遺構と遺物	38
第II章 遺跡の環境	31	第IV章 まとめ	42
第1節 地理的環境	31		

【挿 図】

図1 調査地位置図	29	図8 2号土坑実測図	38
図2 調査地周辺の旧地形	31	図9 1・3号土坑実測図	39
図3 周辺の遺跡	33	図10 調査写真	39
図4 既往調査と今次調査区	35	図11 出土遺物実測図	41
図5 遺構分布図	36	図12 遺物写真	41
図6 西壁面土層断面図	37	図13 覆土別遺構分布図	42
図7 1号溝跡実測図	38		

【表】

表1 出土遺構一覧表	40	表2 出土遺物観察表	41
------------	----	------------	----

報告書抄録

浅川扇状地遺跡群

中越遺跡(2)



中越一丁目ブレインマンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

例 言

- 1 本報告は、民間開発事業「中越一丁目ブレインマンション新築工事」に伴い実施した緊急発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、開発事業者である個人と、長野市長 加藤久雄 との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会（担当：文化財課埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 調査地は、長野県長野市中越一丁目 221 番 2 外 に所在する。調査面積は 293㎡である。
- 4 発掘調査は、平成 28 年 5 月 30 日から平成 28 年 6 月 27 日までの 29 日間実施した。
- 5 本報告の編集・執筆は清水竜太が担当し、埋蔵文化財センター職員の応援を得た。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は「ANG II」である。

凡 例

本報告は、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 遺構実測図の方位は座標北を表している。
- 2 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 138° 30′ 00″、北緯 36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 3 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
 竪穴住居跡…S B、掘立柱建物跡…S T、土坑…S K、溝…S D、小穴…S P、遺構内柱穴・小穴…P
- 4 遺構実測図は、1/20 で作成した原図をもとに、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝を 1/80、土坑を 1/40 で掲載した。
- 5 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器を 1/4、土器拓影を 1/3、石器を 1/3、玉類を 1/1 で掲載した。
- 6 遺物写真の縮尺は任意である。
- 7 土器実測図において、 は赤色塗彩の範囲を表す。また、断面の  は須恵器を表す。

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査の契機と事務経過

調査地は長野市の中心市街地から北東にある中越一丁目に位置する。周辺は、北側がしなの鉄道北しなの線・北陸新幹線に、東側は県道長野荒瀬原線に隣接していることから交通の便が良く、最寄り駅である北長野駅周辺では近年大規模な再開発が行われたことにより利便性の高い地域となっている。

この中の住宅地の一角にマンション建設工事が計画され、2015年（平成27）12月3日、工事の設計・施工を行う株式会社ヤマウラの担当者より埋蔵文化財の包蔵地に関する照会を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である浅川扇状地遺跡群の範囲内にあることから、文化財保護法（以下、法）第93条の規定に基づく届出が必要である旨を回答している。これを受け、翌2016年（平成28）1月8日付で開発事業者である個人より法第93条第1項による届出が長野市教育委員会宛に提出され、同月14日付27埋第2-198号にて法第93条第2項による発掘調査（試掘調査）の指示を行った。

試掘調査は、3月7日に提出された試掘調査依頼書に基づき、翌8日に実施した。開発区域の任意の位置に試掘坑を2箇所掘削したところ、地表面下約40cmにて弥生土器・土師器を含む遺物包含層を確認し、その下層から遺構の掘り込みを検出した。この結果を受け、3月14日付27埋第5-19号にて、工事着工前に記録保存を目的とした発掘調査の実施が必要となることを回答し、同月25日に発掘調査依頼書を受理した。この後、3月30

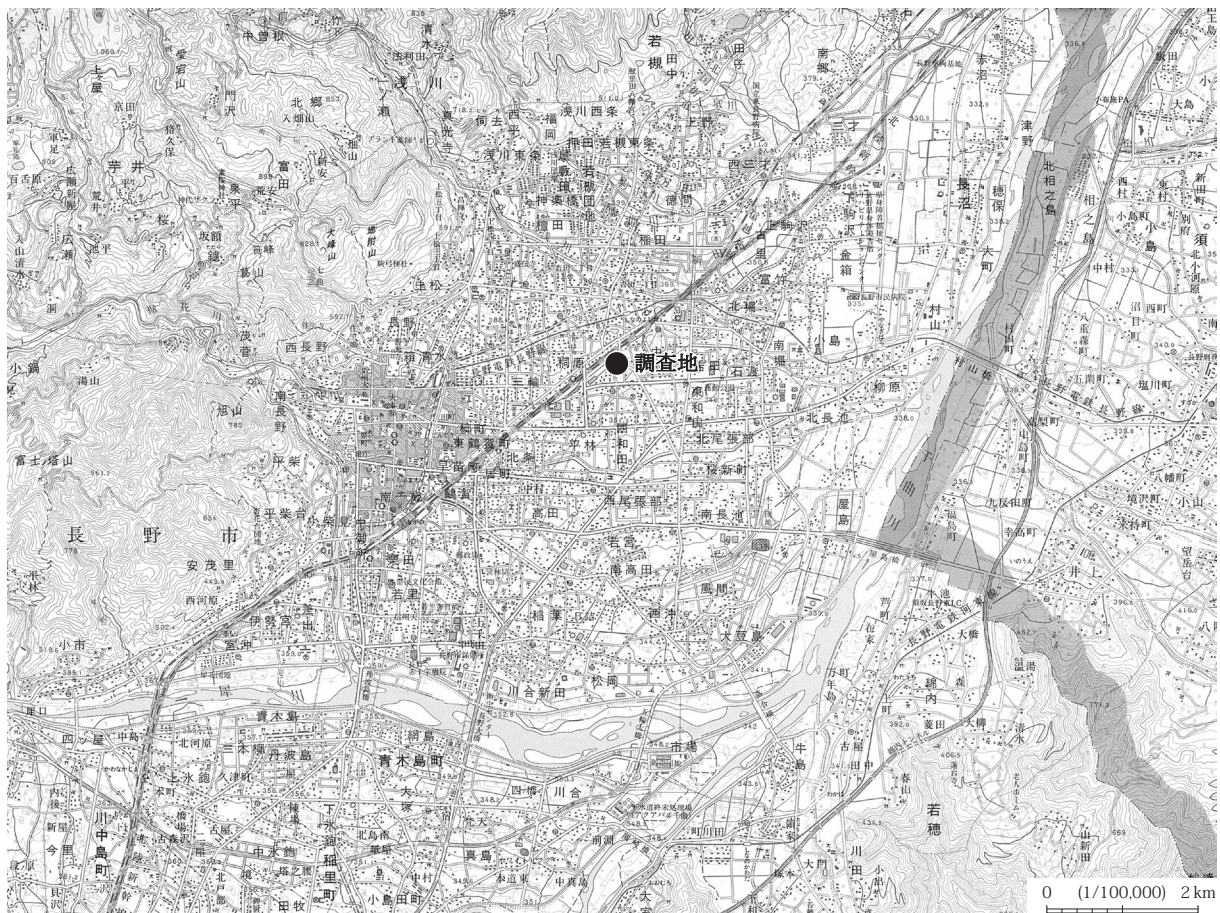


図1 調査地位置図

日、4月11日に実施した保護協議で、開発区域 926.22㎡のうち建物部分の約 240㎡が調査対象となること、同一年度内で現地調査および報告書刊行を行うことを確認し、5月25日付で開発事業者と長野市長との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

現地における発掘作業は5月30日から6月27日までの29日間実施し、その後整理作業に移行した。これに基づき、翌2017年（平成29）3月2日付で委託料の減額に関する変更協議を行い、同月15日付で変更委託契約を締結し、発掘調査報告書として本書を刊行したところで委託業務を完了した。

第2節 調査の経過と方法

発掘調査は2016年（平成28）5月30日から開始した。調査区の設定にあたっては、調査対象である建物部分に余掘幅の1mを加えるとともに、既に仮設水道が敷設されていた北西隅を調査範囲から除外している。表土掘削は重機を使用し、6月1日までに全面で遺構確認面を露出させた。作業員の雇用は6日から開始し、壁面の清掃および側溝の掘削を行ったのち、遺構検出作業を8日まで実施した。この結果、竪穴住居跡4軒・掘立柱建物跡1棟・溝4条のほか複数の土坑・小穴を検出し、同日より22日まで掘削作業を行った。この間、調査区中央に残存



図2 作業風景

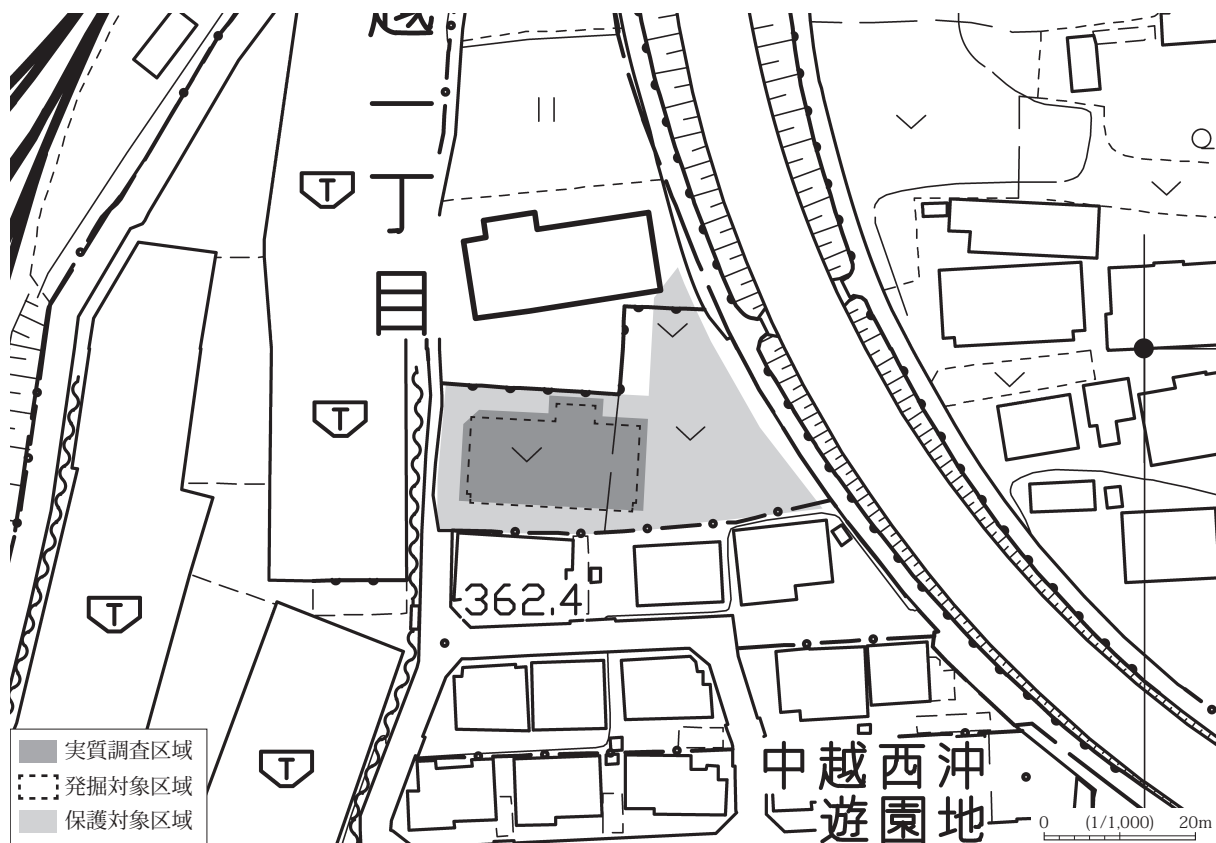


図3 調査区位置図

していた包含層を除去したことで掘立柱建物跡1棟を新たに検出したほか、堅穴住居跡とみられた落ち込みについては1箇所が土坑、1箇所が自然堆積層であることが判明した。遺構測量は、土層断面図の一部を除いて株式会社写真測図研究所に委託し、作業の進捗に合わせて適宜依頼した。また記録写真は、個別遺構については35mm判フィルム一眼レフカメラを使用してモノクロネガフィルムおよびカラーズライドフィルムで撮影し、調査区全景についてはフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用したラジコンヘリコプターによる航空撮影を22日に実施した。発掘機材の撤収を含めたすべての現地作業は27日に終了している。

整理作業は、8月から9月にかけて出土遺物の洗浄・注記・接合作業を行ったのち、11月から図面整理、12月から遺物実測・報告書編集作業を順次進め、3月25日の本書の刊行をもってすべての作業を終了した。

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	近藤 守
統括管理者	文 化 財 課	課 長	青木 和明
調 査 機 関	埋蔵文化財センター	主幹兼所長	森山 正美
		課長補佐	飯島 哲也（調査担当者）
		（庶務）係 長	竹下 今朝光
		職 員	宮崎 千鶴子
		（調査）係 長	風間 栄一
		主 事	小林 和子
		研 究 員	清水 竜太（主任調査員）・日下 恵一（調査員） 田中 暁穂・遠藤 恵実子・篠井 ちひろ・鈴木 時夫 高津 希望
発掘調査員	大久保 邦彦		
発掘作業員	植木 義則・上原 律江・内田 正征・江守 久仁子・岡沢 貴子・岡宮 純子・金井 節 倉嶋 恵美子・酒井 雅代・神保 義千代・杉本 千代・月岡 純一・峯村 茂治・村田 岳仁 山口 勝己・山本 光洋		
整理調査員	青木 善子・鳥羽 徳子・武藤 信子		
整理作業員	清水 さゆり・関崎 文子・西尾 千枝・待井 かおる・三好 明子		
機材賃貸借	株式会社ヤマウラ 長野支店		
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所		

遺構面までの表土掘削については、開発事業者から使用する重機の現物による提供を受けた。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

中越遺跡が所在する長野市は長野県の北部に位置する。長野市は周囲を山並みに囲まれ、古来善光寺平と呼ばれた長野盆地とその東西の山地に市域を広げている。長野盆地は千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地を代表する盆地で、長さ約30km、幅約10kmの南西-北東方向に延びる紡錘形を呈する。西側の山麓線は、犀川・裾花川・浅川などの扇状地が大きな弧を連ねた単調な形状であるのに対し、東側は壮年期地形を呈する東部山地の山岳が盆地底から急激に突出し、山麓線は複雑に屈曲している。中央を縦貫する千曲川は、上流で供給された土砂をその流路に堆積させ、標高330～360mの平坦な千曲川氾濫原を形成しているが、盆地床の大部分は東西の山地から流れ出た中小河川の扇状地で構成されている。

こうした地形状況のうち、中越遺跡は長野盆地北西部を占める浅川扇状地上に立地している。浅川扇状地は、西部山地の北部にそびえる飯縄山（標高1,917m）に源を発する浅川が形成した扇状地である。標高500mの浅川東条を扇頂として扇状地面を南東に広げ、南は裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸びて千曲川氾濫原の後背湿地に接する。中越遺跡が位置するのは扇頂から2.5km南東の扇端部で、調査地の標高は361.5mである。浅川は、扇頂側で扇状地を開析しながら扇端側では天井川を形成し、前面に新たな扇状地を形成しつつある状態である。このため、平均勾配は中越遺跡付近を境に変化し、扇頂側で25/1,000、扇端側で15/1,000となっている。

調査地の現況は畑地であったが、中越地区の北にはしなの鉄道北長野駅があり、周辺の宅地化は著しい。また西にはJR貨物北長野駅の広大な敷地が広がっている。

引用・参考文献

長野市誌編さん委員会 1997『長野市誌 第1巻 自然編』

第2節 周辺の遺跡

中越遺跡が立地する浅川扇状地は市内有数の遺跡密集地である。しかし、個々の遺跡の区分が市街化の進行により困難なことから、扇状地全域を包括する「浅川扇状地遺跡群」を設定し、発掘調査を実施した地点に対して字名などを冠した遺跡名を付している。ここでは浅川扇状地およびその周囲に立地する遺跡について時期別に概観していく。

縄文時代の遺跡は、若槻地区や吉田地区など、扇頂部および扇中央部の浅川沿岸に偏在する。松ノ木田遺跡(4)は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時期を代表する遺跡である。前期後葉の遺構からは、玦状耳飾とその破片、破片を加工した垂飾品と勾玉、およびその未製品が30点余り出土し、玦状耳飾を転用した石製装身具類の生産が行われていたと考えられている。

弥生時代になると扇状地の本格的な開発が始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。檀田遺跡(5)では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半が栗林式土器編年における最古段階に位置づけられ、同時期の浅川端遺跡(7)・牟礼バイパスD地点遺跡(27)に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、居住域に隣接して礫床木棺墓を含む9基の木棺墓群が検出され、当時の集落構造を良好に示している。後期後半においては在地土器と共に多くの北陸系土器が出土した。

同様の事象は本村東沖遺跡（9）・長野女子高校校庭遺跡（11）など該期の大規模集落でみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末～古墳時代前期に先じる共伴事例として評価される。後期初頭吉田式土器の標識遺跡として著名な吉田高校グランド遺跡（19）では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏃が出土し、該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。

古墳時代にはこれまで遺跡が希薄であった扇中央部の桐原地区や扇端部の平林地区でも分布が認められるようになる。前期の集落遺跡はいずれも検出住居数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡（15）・桐原宮北遺跡（16）・桐原牧野遺跡（17）・吉田四ツ屋遺跡（23）では周溝墓が見つかった。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落と



No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古墳	古代	中世	長野市報告番号
1	地附山古墳群(7基)	古墳			○			30
2	浅川西条遺跡	集落跡				○		2
3	小坂屋遺跡	集落跡				○		94
4	松ノ木田遺跡	集落跡	○					77・82
5	檀田遺跡	集落跡	○	○	○	○		41・105
6	湯谷東古墳群(7基)	古墳			○			10
7	浅川端遺跡	集落跡	○	○	○	○		29・102・122
8	押鐘遺跡	集落跡				○		41・136
9	本村東沖遺跡	集落跡	△	○	○	○		50・67・111
10	下宇木遺跡	集落跡		○	○			38
11	長野女子高校校庭遺跡	集落跡		○	○	△		134
12	三輪遺跡	集落跡	○	○	○	○		6・20・38・49・62・75・140
13	本郷前遺跡	集落跡		○	○		○	103
14	桐原宮西遺跡	集落跡			○			108
15	返目遺跡	集落跡	△		○			108
16	桐原宮北遺跡	集落跡	△	○	○	○		130
17	桐原牧野遺跡	集落跡			○	○		143・145
18	桐原要害(高野氏館跡)	城館跡					○	145
19	吉田高校グランド遺跡	集落跡		○				22・97
20	吉田町東遺跡	集落跡	△	○	○	○		71・112・126
21	吉田古屋敷遺跡	集落跡	○	○	○	○		84・108・118・119・120
22	辰巳池遺跡	散布地	△	○	○			103
23	吉田四ツ屋遺跡	集落跡	○	○	○	○		75
24	牟礼バイパスA地点遺跡	集落跡	○	△				12
25	牟礼バイパスB地点遺跡	集落跡			○	○		17・65

No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古墳	古代	中世	長野市報告番号
26	牟礼バイパスC地点遺跡	集落跡				○	○	17
27	牟礼バイパスD地点遺跡	集落跡		○	○	○		17
28	徳間本堂原遺跡	集落跡	△	○	○		○	69・139
29	徳間番場遺跡	散布地		○		○	○	144
30	徳間榎田遺跡	集落跡			○			99
31	徳間柳田遺跡	集落跡		○	○	○		9・47
32	徳間中南遺跡	散布地		○		○		144
33	稲添遺跡	集落跡			○	○	○	47
34	本堀遺跡	集落跡		○	○			47
35	二ツ宮遺跡	集落跡	○	○	○	○	○	47・71・122
36	天神木遺跡	集落跡		△				104
37	権現堂遺跡	集落跡		○	○	○		104・108
38	樋爪遺跡	集落跡		○	○	○		104
39	平林東沖遺跡	集落跡	△	○				116・138
40	駒沢新町遺跡	集落跡				○		10・55・126
41	上長畑遺跡	集落跡					○	111
42	駒沢城跡	城館跡					○	76・127

△は遺物のみの出土、○は遺構・遺物の出土を示す。
 ・ゴシック体は浅川扇状地遺跡群に含まれない遺跡である。

図4 周辺遺跡位置図

みられ、石製模造品の製作工房を含む 56 軒の住居跡が検出されたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土した。集落の存続期間から、地附山古墳群 (1) の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡 (40) では 5 箇所祭祀遺構が確認され、1 号祭祀遺構からは総数 500 個体を超える多量の土師器と共に、900 点を数える白玉や石製模造品・鉄鏃・ガラス小玉などが出土した。後期は、90 軒の住居跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群 (6) は 6 世紀末頃構築された 7 基の円墳からなる古墳群で、現在は 2 号墳のみが残されている。

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇中央部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物としては、本堀遺跡 (34)・牟礼バイパス C 地点遺跡 (26)・同 D 地点遺跡から見つかった 7 世紀代に遡る軒瓦や、稲添遺跡 (33) で見つかった平安時代の瓦塔など、仏教関連の遺物が多く出土している。

中世は、各集落遺跡で見つっている遺構・遺物のほか、15 箇所の城館跡が知られる。発掘調査が実施されたのは駒沢城 (42) と桐原要害 (高野氏館跡) (18) の 2 箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や柵列・掘立柱建物跡などが検出されている。

第 3 節 いわゆる「国鉄貨物基地遺跡」と「国鉄車両基地遺跡」について

調査地一帯はかつて「国鉄貨物基地遺跡」として把握されており (図 5 の 160)、長野県北部における弥生時代後期の土器型式、すなわち箱清水式土器の基準資料が出土した遺跡として長野県考古学史上きわめて著名である。しかし、2015 年 (平成 27) に調査地から北東 150m の地点で実施された宅地造成に伴う発掘調査では新規に設定された中越遺跡として調査・報告が行われ (長野市教育委員会 2016)、「国鉄貨物基地遺跡」は使用されていない。こうした措置の背景にあるのが、「国鉄貨物基地遺跡」と遺跡名が酷似する「国鉄車両基地遺跡」 (図 5 の 161) との混同から生じた遺跡管理上の重大な問題である。今回の調査は中越遺跡として 2 度目の調査となるが、本節では改めて両遺跡のこれまでの取り扱いを振り返り、この問題の経過を整理しておくことにしたい。なお煩雑さを避けるため、遺跡が所在する地籍から、「国鉄貨物基地遺跡」を中越地点遺跡、「国鉄車両基地遺跡」を古野⁽¹⁾地点遺跡と仮称して記述を進める。

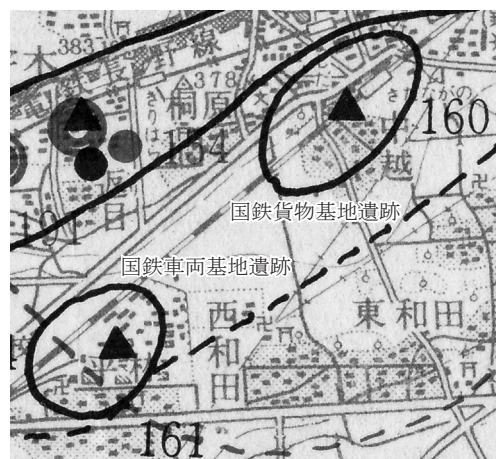


図 5 国鉄貨物基地遺跡・国鉄車両基地遺跡の位置と範囲 (森嶋ほか 1976 より引用・改変)

中越地点遺跡は、長野県教育委員会が 1966 年 (昭和 41) に長野市内東北部で実施した緊急分布調査 (長野県教育委員会 1967、以下、県分布調査) で新たに発見された遺跡で、当初は「北長野貨物駅遺跡」といった。遺跡名の元になったのは調査地に隣接する国鉄北長野貨物駅 (現在の J R 貨物北長野駅) で、所在地欄には今回の調査地の北西隣の地番が記載されている。報文によれば、「国鉄の貨物駅の敷地として遺跡の大部分が破壊されたが、「破壊をまぬがれた地域に 2 つのピットを入れた」ところ、「弥生後期一箱清水期と、国分期の層序が確認され」、「弥生式一 (栗林式～箱清水式土)・土師器、須恵器の出土があった」という。またこの調査は、南西に 1km ほど離れた「古野」に所在する国鉄長野駅車両基地 (現在の J R 東日本長野総合車両センター) でも行われた。施設名の表記が若干異なり、また“遺跡”が抜ける誤植もあるが、古野地点遺跡を対象としたものである。報文には、「遺跡の大部分は車両基地建設にともなって破壊された」ものの、「破壊をまぬがれた部分の排水

表1 中越地点遺跡と古野地点遺跡の記載の変化

	中越地点遺跡	古野地点遺跡
1967 長野県分布調査	調査地名：北長野貨物駅遺跡 所在地：長野市大字中越字桐原境沖237の1	調査地名：国鉄長野駅車両基地 所在地：長野市古野
～1977 長野県遺跡台帳	番号：8072 遺跡名：北長野貨物駅遺跡 所在地：長野市大字中越字桐原境沖237の1	番号：7963 遺跡名：国鉄電車両基地遺跡 所在地：長野市古野
1981 県史遺跡地名表	県史番号：124 番号：8072 遺跡名：国鉄長野駅車両基地遺跡 所在地：古野	

溝の断面」から、「縄文中期（加曾利E式）、弥生中期（栗林式土器）、後期（箱清水式土器）、土師、須恵器」が出土したことが記されている。これらの成果を受け、長野県遺跡台帳（以下、県台帳）では8072番に「北長野貨物駅遺跡」、7063番に「国鉄電車両基地遺跡」がそれぞれ登録されることとなった⁹⁰。両遺跡とも国鉄の施設名を冠するが、この段階では共通する語句はなく、遺跡の内容も異なっていることから、混同の余地はなかったものと思われる。

1970年（昭和45）、笹澤浩氏は中越地点遺跡内の畑地から国鉄施設建設前に一括採集された土器群をもとに箱清水式土器の検討を行い、中越地点遺跡の呼称に「国鉄貨物基地遺跡」を用いた（笹澤1970）。どのような経緯で県台帳と異なる遺跡名が使用されたのか明らかではないが、挿図キャプションでは「北長野貨物基地遺跡」とも表記しており、当該施設に対する当時の様々な呼称が遺跡名に反映されたことは間違いなさそうである。この論文はそれまで不明瞭であった箱清水式土器の型式内容を明らかにしたもので、以後多くの文献に引用され、中越地点遺跡は「国鉄貨物基地遺跡」として広く認知されることとなった。

一方の古野地点遺跡は県分布調査以降調査が進展しておらず、両遺跡の認知度に明確な差があったことは想像に難くない。ただ、古野地点遺跡の名称は県台帳の遺跡名と異なる「国鉄車両基地遺跡」が一般化していたようで、名称の違いが「貨物」と「車両」だけとなった両遺跡の取り違えは比較的早くから起きていた⁹¹。そしてこの傾向が顕著に表れたのが、1981年（昭和56）に刊行された『長野県史 考古資料編 全一卷（一）遺跡地名表』（以下、県史）である。この中から両遺跡に関連する項目として抽出できるのは、県史番号長野市長水地区124番の「国鉄長野駅車両基地遺跡」のみである。「国鉄長野駅車両基地遺跡」は県台帳の8072番、すなわち中越地点遺跡と対応する遺跡とされるが、遺跡名・所在地の記載は古野地点遺跡のものであり、また遺構・遺物についても、「（縄）加曾利E式／（弥）栗林式、箱清水式／（古）鬼高式」とあるように、県分布調査における古野地点遺跡の報文とほぼ同じ内容が記載される。両遺跡を統合した可能性も考慮されるが、それまでの経緯を考えれば古野地点遺跡を想起させる情報が優先されるのは不自然であるし、また、後に刊行された『長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物』では前掲の笹澤論文所収の実測図に対して「旧国鉄貨物基地」のキャプションが付けられていることも考えると、中越地点遺跡を念頭に置きながら古野地点遺跡の情報を誤って混入させたと思われるのが妥当である。

この扱いはその後の遺跡管理に大きな影響を与えた。すなわち、1989年（平成元）に長野県の要請に応じて新たに作成された長野市遺跡台帳では、県史地名表の誤りを引き継ぐ形で県史124番、県台帳8072番に対応する「国鉄車両基地遺跡」のみが記載されることになったのである。しかも備考欄には「位置不明」とあり、中越地点遺跡に対する認識はいつそう混沌としたものになった。「国鉄車両基地遺跡」に対してはその後の台帳改訂作業の中で若干の修正が加えられていくが、根本的な解決に至ることはなく、中越地点遺跡は長期間にわたり台帳上に存在しない遺跡であった。なお、この間にも中越地点遺跡について取り上げた文献は見出されるが、遺跡名や所在地に関する誤りはなお散見される状況であり、遺跡管理上だけでなく考古学研究上にも支障をきたして

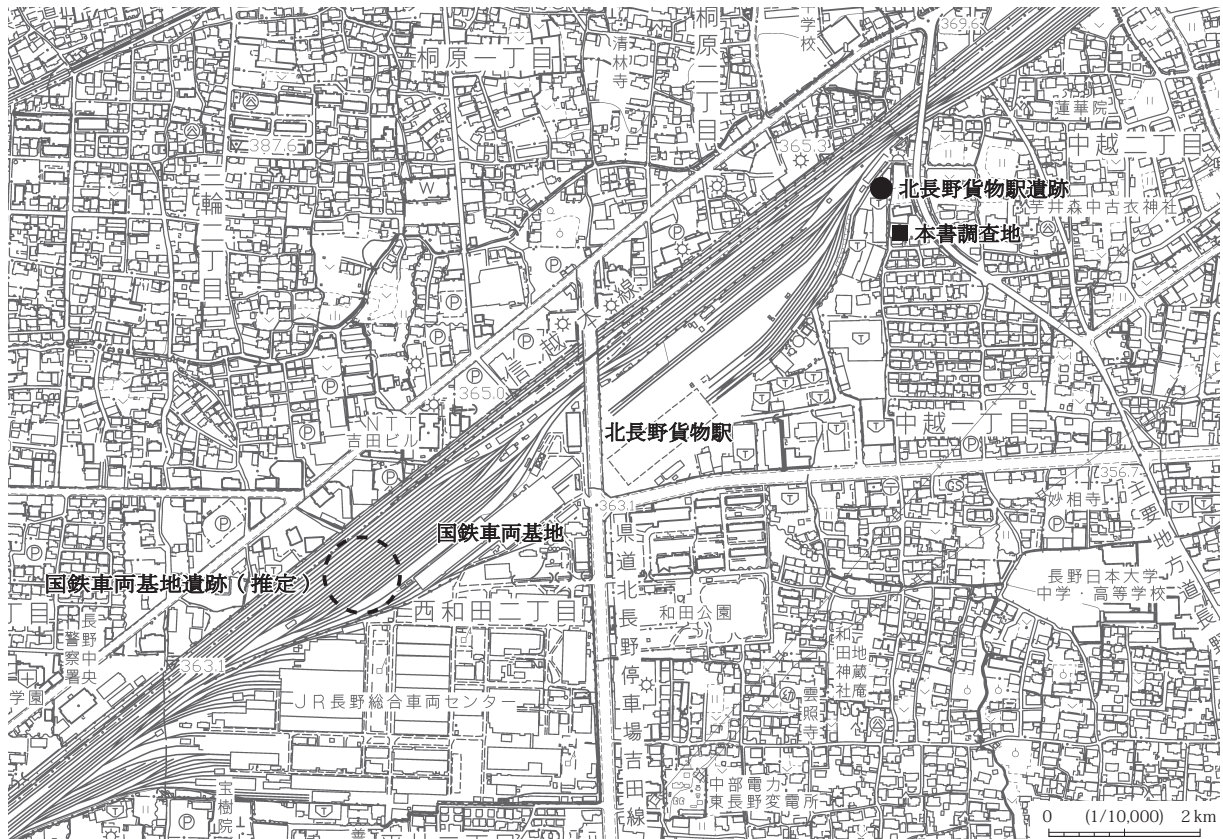


図6 北長野貨物駅遺跡・国鉄車両基地遺跡の位置

いたといえる。

2015年、浅川扇状地遺跡群内に位置する中越地籍内で発掘調査が計画され、該当遺跡が検討された。この際、いまだ混乱状況にあった既存の遺跡名ではなく、浅川扇状地遺跡群における遺跡名命名の慣例に従って新たに中越遺跡を設定することとなった。なお現在運用されている遺跡地図・台帳では、県分布調査の調査地点に「北長野貨物駅遺跡」・「国鉄車両基地遺跡」を登録し、上述の経過が追認できるようにしている（図6）。

註

- (1) 1998年（平成10）に実施された住居表示により、現在は桐原一丁目となっている。
- (2) 分布調査は30遺跡を対象に行われ、26遺跡が新発見、4遺跡が登録済みであった。各遺跡がどちらに該当するか明記されていないが、県台帳では「北長野貨物駅遺跡」が他の多くの調査対象遺跡と列記されているのに対し、「国鉄電車両基地遺跡」には100以上若い番号が付されており、前者が新発見、後者が登録済みと判断できる。
- (3) 1975年（昭和50）に刊行された『浅川西条』では、周辺主要遺跡分布図の中越地点遺跡を示す位置に「国鉄車輛基地遺跡」という誤ったキャプションが付されている。

引用・参考文献

- 笹澤浩 1970「箱清水式土器の再検討—長野市内発見資料を中心として」『信濃』第3期第22巻第4号 信濃史学会
- 長野県教育委員会 1967『新産都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
- 長野県史刊行会 1981『長野県史 考古資料編 全一卷（一）遺跡地名表』
- 長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物』
- 森嶋稔ほか 1976「上水内地方原始・古代遺跡分布図」『長野県上水内郡誌 歴史篇』上水内郡誌編集会
- 長野市教育委員会 1975『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第2集
- 長野市教育委員会 2016『中越遺跡』長野市の埋蔵文化財第146集

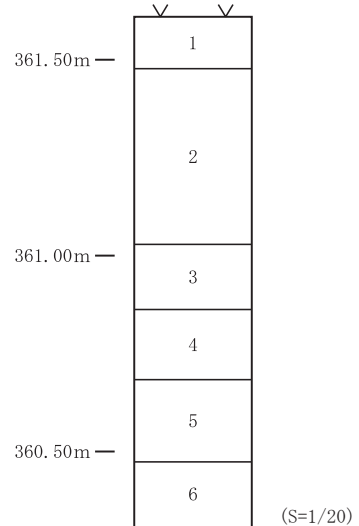
第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査概要

今回の調査は、開発工事によって遺跡に影響が及ぶ建物部分（約 240 m²）を対象に実施した。調査地の現況は 2 区画の畑地で、地表の標高は東側の区画が 30cm ほど低い。

基本層序は調査区南壁中央部で確認した（図 7）。調査区東側では地表面が低くなったぶん 2 層が薄くなっているが、3 層以下の堆積は概ね全域で共通し、検出される高さにも顕著な差は認められない。すべての遺構は地山である 5 層以下を掘り込んで構築され、4 層の包含層がその上を被覆していることから、遺構検出面は 5 層上面に設定した。ただ、4 層と 5 層の差がきわめて不明瞭であったため、表土掘削がところにより 4 層中に留まったり、6 層近くまで及んだりしており、遺構確認面の高さは若干上下している。

検出した遺構は、弥生時代中期後半の竪穴住居跡 1 軒・土坑 2 基、弥生時代後期後半の竪穴住居跡 1 軒、奈良時代の溝 3 条、および時期不明の掘立柱建物跡 4 棟・土坑 8 基・溝 1 条・小穴 32 基である。また、遺物としては古墳時代後期・平安時代・中近世の土器も少量ながら出土した。所属時期の明らかでない遺構は上に挙げた時期のいずれかに該当すると思われるが、掘立柱建物跡については柱穴列の軸方向が概ね共通し



- 1、黒褐色土 (2.5Y 3/2) …表土
- 2、暗灰黄色粘質土 (7.5YR 2/1) …耕作土
- 3、黒褐色粘質土 (2.5Y 3/1) …耕作土
- 4、黒色土 (7.5YR 2/1)
φ 1~10cm の礫を多く含む…包含層
- 5、黒色土 (10YR 2/1)
φ 1~10cm の礫をとところにより含む…地山

図 7 基本層序

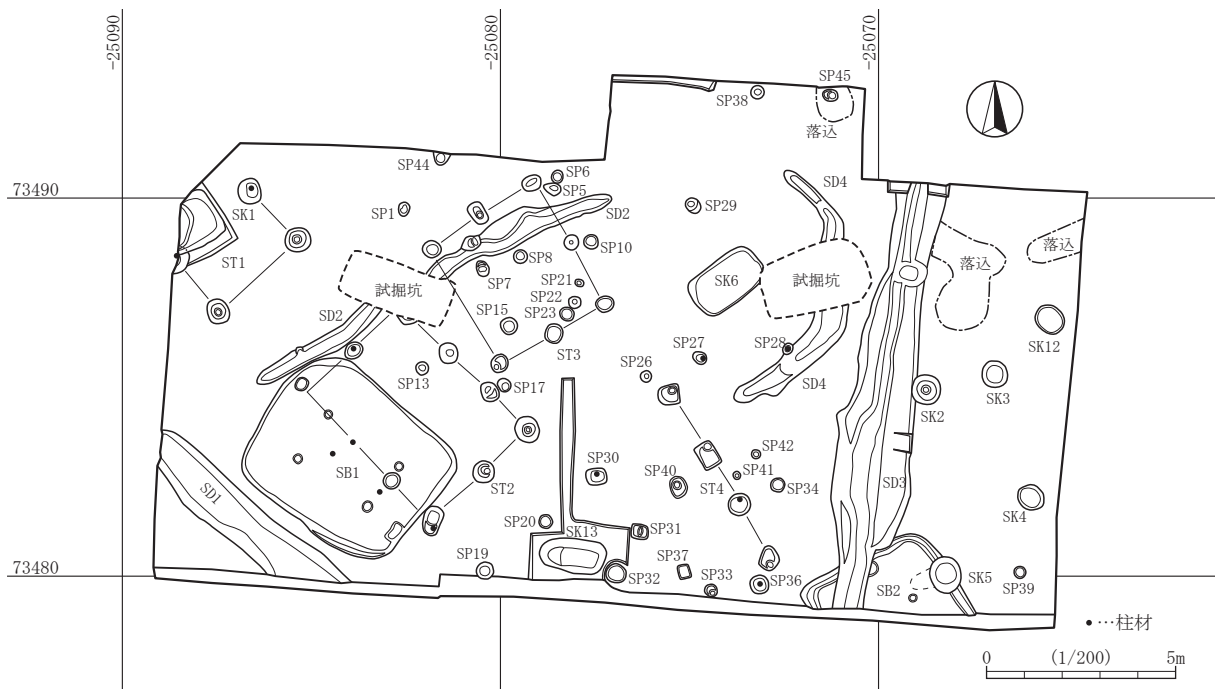


図 8 調査区全体図

ており同時期遺構の可能性が高い。なお、調査地は地下水位が高く、6層上面から15cmほど下がると湧水が発生する。このため、掘立柱建物跡の柱穴や、柱穴とみられる土坑・小穴からは、部分的に遺存した柱材が比較的多く認められた。

表2 遺構一覧表

遺構名	形態	規模（残存値）	出土土器					時期	備考	
			重量（g）	弥生土器	土師器	黒色土器	須恵器			時期不明
S B 1	隅丸長方形	長辺 5.06m、短辺 4.07m、深さ 34cm	4,625	○			○	○	弥生後期	焼失住居
S B 2	隅丸長方形	長辺 3.68m、短辺(2.57m)、深さ 32cm	1,610	○			○	○	弥生中期	焼失住居、半球状勾玉出土
S T 1	1間×(1間)	2.82m×(1.8m)	40					○	不明	柱材残存
S T 2	2間×3間	3.61m×4.72~4.92m、	415	○	○	○		○	不明	【SP11・SP12・SP14・SP18 SK9・SK8】柱材残存
S T 3	2間×2間	3.75m×3.32m	275	○	○			○	不明	【SP16・SP4・SP2・SP3 SP9・SP25・SP24・SK7】
S T 4	3間	5.3m	70	○			○	○	不明	【SP43・SK10・SK11・SP35】
S D 1	-	長さ、5.27m、幅、100~129cm、深さ、17cm	625	○	○			○	○	奈良
S D 2	-	長さ、10.56m、幅 37~83cm、深さ 17cm	415	○	○			○	○	奈良
S D 3	-	長さ 11.35m、幅 78~209cm、深さ 39cm	8,200	○	○	○	○	○	○	奈良
S D 4	-	長さ 7.88m、幅 32~90cm、深さ 30cm	70	○				○	不明	
S K 1	隅丸長方形	長辺(141cm)、短辺(103cm)、深さ 30cm	2,725	○						弥生中期
S K 2	円形	径 78cm、深さ 29cm	355	○	○			○	○	不明
S K 3	円形	径 70cm、深さ 20cm	135	○	○			○	○	不明
S K 4	楕円形	長径 75cm、短径 65cm、深さ 17cm	50	○				○	不明	
S K 5	楕円形	長径 92cm、短径 83cm、深さ 18cm	100	○				○	不明	
S K 6	隅丸長方形	長辺 204cm、短辺 120cm、深さ 31cm	545	○				○		弥生中期
S K 12	楕円形	長径 80cm、短径 69cm、深さ 33cm	5					○	不明	
S K 13	楕円形	長径 175cm、短径 91cm、深さ 63cm	110					○	不明	
S P 1	楕円形	長径 37cm、短径 30cm、深さ 24cm	5					○	不明	
S P 5	楕円形	長径 47cm、短径 32cm、深さ 18cm							不明	
S P 6	楕円形	長径 34cm、短径 31cm、深さ 32cm	10		○			○	不明	柱材残存
S P 7	楕円形	長径 44cm、短径 31cm、深さ 27cm							不明	
S P 8	円形	径 36cm、深さ 30cm	5					○	不明	
S P 10	円形	径 38cm、深さ 12cm							不明	
S P 13	円形	径 34cm、深さ 30cm	15					○	不明	
S P 15	円形	径 44cm、深さ 14cm	10	○				○	不明	
S P 17	円形	径 36cm、深さ 24cm							不明	
S P 19	円形	径 46cm、深さ 33cm	10	○					不明	
S P 20	円形	径 36cm、深さ 26cm							不明	
S P 21	長方形	長辺 29cm、短辺 18cm、深さ 29cm	30	○				○	不明	
S P 22	円形	径 34cm、深さ 28cm	60	○				○	不明	
S P 23	楕円形	長径 40cm、短径 34cm、深さ 37cm	80	○					不明	
S P 26	円形	径 29cm、深さ 21cm	20					○	不明	
S P 27	楕円形	長径 38cm、短径 32cm、深さ 24cm							不明	柱材残存
S P 28	楕円形	長径 32cm、短径 24cm、深さ 20cm	5	○					不明	柱材残存
S P 29	長方形	長辺 44cm、短辺 35cm、深さ 16cm	5	○					不明	
S P 30	長方形	長辺 55cm、短辺 44cm、深さ 20cm	35	○				○	不明	柱材残存
S P 31	長方形	長辺 44cm、短辺 38cm、深さ 25cm							不明	
S P 32	円形	径 53cm、深さ 50cm	65	○			○	○	不明	
S P 33	円形	径 35cm、深さ 23cm							不明	
S P 34	円形	径 38cm、深さ 14cm							不明	
S P 36	円形	径 50cm、深さ 23cm							不明	柱材残存
S P 37	長方形	長辺 38cm、短辺 32cm、深さ 11cm							不明	
S P 38	円形	径 35cm、深さ 13cm							不明	
S P 39	円形	径 32cm、深さ 7cm							不明	
S P 40	長方形	長径 56cm、短径 44cm、深さ 17cm							不明	
S P 41	円形	径 22cm、深さ 5cm							不明	
S P 42	円形	径 24cm、深さ 6cm							不明	
S P 44	楕円形	長径 46cm、短径 (34cm)、深さ 12cm							不明	
S P 45	楕円形	長径 41cm、短径 31cm、深さ 17cm							不明	

第2節 遺構と遺物

SB1

調査区南西に位置する。ST2のP8・P9に掘り込まれているが、調査時は重複を認識せず、両遺構を同時に掘削している。

平面形は、北隅がやや外方に張り出したいびつな隅丸長方形を呈する。南西壁南側の段差は、遺構確認時に設定した範囲と実際の壁面にずれがあったことから生じたもので、遺構本来の形態ではない。規模は長さ5.06m、幅4.07mで、主軸方向は座標北に対して54度西に振れている。湧水のため床面の遺存状況は不良であるが、周辺部から中央部へわずかな下り勾配があり、貼床は検出されなかった。確認面からの深さは最大で34cmを測る。小穴は7箇所検出され、P1～P4が支柱穴、P5が入り口施設に関連する掘り込みとみられる。炉は検出されなかったが、浸水状況下における床面検出作業のなかで失われた可能性もある。床面の壁面近くからは、炭化材が少量出土した。住居の中心部を基点に放射状に検出されており、崩落した柱材とみられる。被熱面や炭の広がり認められなかったものの、焼失住居と判断されよう。

遺物は弥生土器を主体とする土器が4,625g出土し、このうち壺(4)・甕(1～3)を図示した。4は頸部から肩部にかけての破片資料である。2条のT字文の間には刺突が施された円形浮文が貼付されている。甕は1が口径17.7cmの小型品、2・3が口径21cm前後の中型品である。3の口縁端部は玉縁状を呈する。口唇部は上方に突出し、内面の稜線が明瞭である。ミガキ調整は粗雑で、内外面にハケ調整や粘土紐接合痕が残る。2・3は南隅床面から正位で並んで出土した。

本遺構の所属時期は、出土遺物より弥生時代後期後半と判断される。

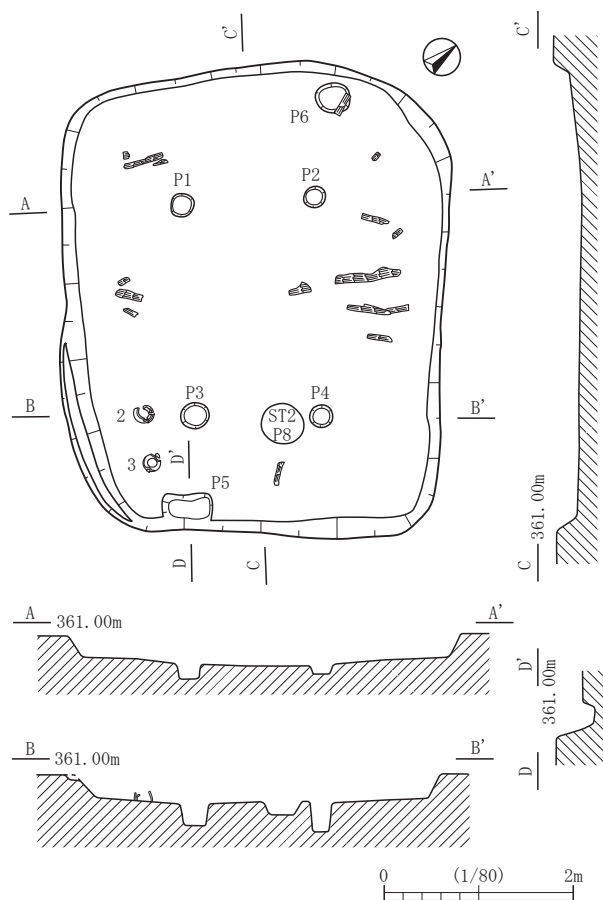


図9 SB1実測図

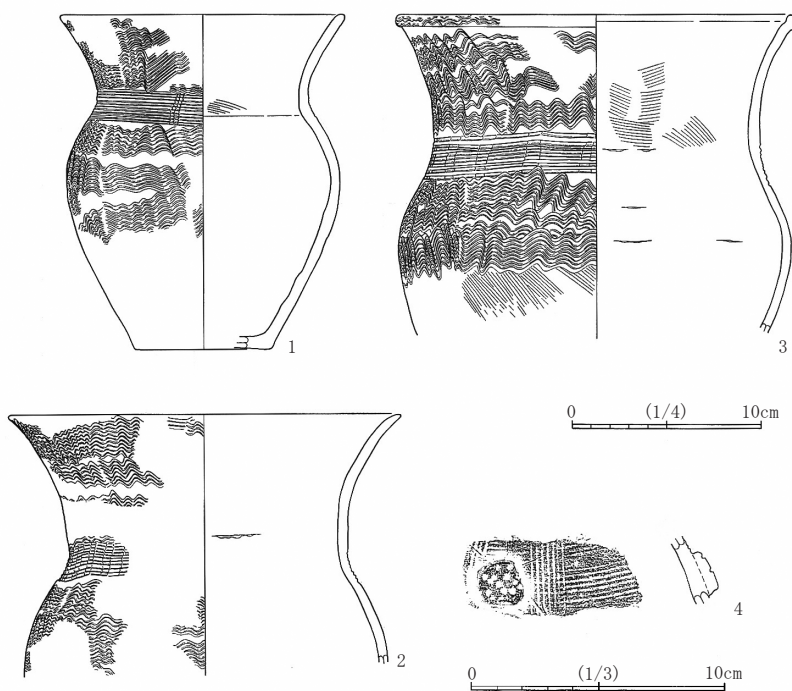


図10 SB1出土遺物実測図

SB2

調査区南東の壁際に位置する。南側が調査区外となるほか、中央をSD3、東側をSK5に掘り込まれている。

平面形は南西・北東方向を長軸とする隅丸長方形とみられ、全体の $1/2 \sim 1/3$ を検出した。主軸方向は座標北に対して25度西に振れている。規模は幅3.68mを測り、長さは最大2.57m遺存する。湧水のため床面の遺存状況は不良であるが、周辺部から中央部に向かってわずかな下り勾配がある。貼床は検出されなかった。確認面からの深さは32cmである。なお、東側の土坑状の落ち込みは、浸水した床面を精査する過程で生じたもので、遺構本来の形態ではない。周溝は検出範囲内で全周しており、幅は20～35cm、床面からの深さは3～5cmを測る。小穴は2箇所検出された。P1は支柱穴で、P2は棟持柱の可能性を考える。炉は検出されず、調査区外に位置しているとみられる。床面より炭化材が出土している。住居中心部を基点として概ね放射状に検出されており、崩落した柱材とみられる。被熱面や炭の広がりは認められなかったものの、焼失住居と判断されよう。

遺物は弥生土器を主体とする土器が1,610g出土し、このうち壺(1・4・5)・甕(2・6)・鉢(3)を図示した。いずれも覆土中からの出土である。1は胴部下部に最大径を有し、調整は外面がハケのちミガキ、内面がハケの

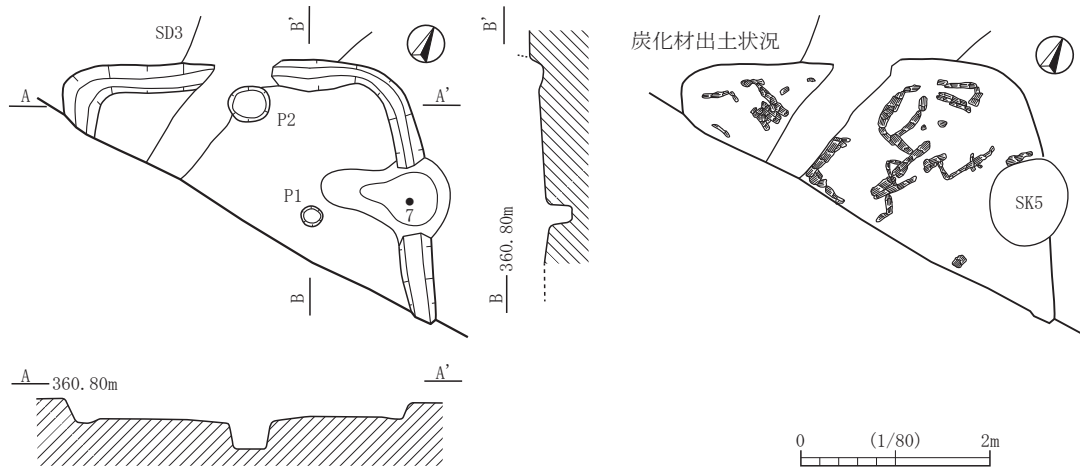


図11 SB2実測図

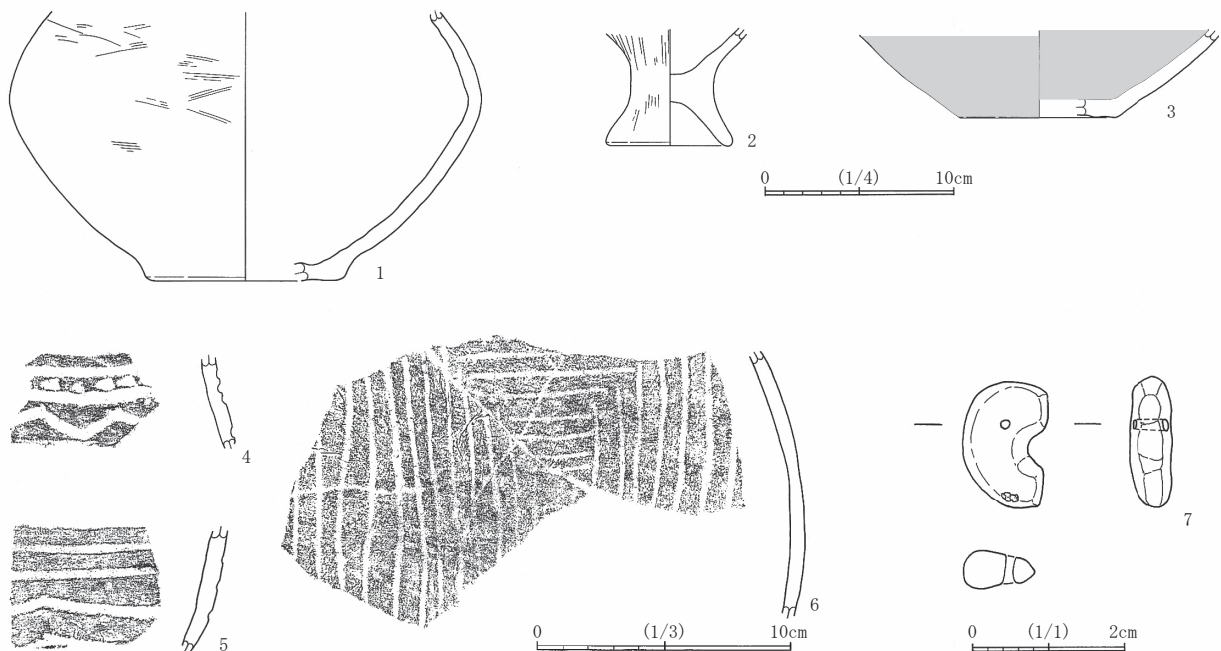


図12 SB2出土遺物実測図

ちナデである。残存範囲内は無文であるが、欠失する頸部に4のような沈線文の文様帯が巡っていると思われる。6は「コ」の字重ね文が施文された破片資料で、器面の湾曲具合から比較的大型の個体と思われる。文様構成から台付甕の可能性もある。3の口縁部は残存しないが、広めの底部から体部がわずかに内湾しながら大きく開き、内外面は赤色塗彩される。このほか勾玉が1点出土した(7)。SK5掘削時に取り上げたものであるが、SB2の遺構範囲が表出した底面(標高360.4m)から出土した点や、住居所属時期との親縁性から、本遺構の覆土中に含有されていた遺物と判断した。いわゆる半球状勾玉と呼ばれるヒスイ製の勾玉で、長さ16mm・幅11mmの半月形を呈し、半円に抉られた腹部を中心に頭部と尾部がほぼ上下対称をなす。断面は両側面が平坦で、腹部と背部は丸味をおびる。厚さは4.5mm～5.5mmで腹部側がわずかに薄い。紐穴は片面穿孔である。重量は2gを計る。

本遺構の所属時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と判断される。

ST1

調査区北西端に位置する。P4がSK1を掘り込んでいるが、調査時に重複を認識せずSK1を先行して掘削したため、本来の形状は留めていない。平面形は検出範囲内で1間×1間であるが、柱穴相互の間隔および周辺の遺構検出状況から、北西の調査区外に範囲が広がるものと予想される。P1・P4で柱材、P2・P3で柱痕が検出され、規模は幅2.82m、長さは1.8m以上となる。

本遺構の所属時期は、切り合い関係から弥生時代中期後半以降と判断されるが、出土した土器がごく少量であり、特定が困難である。

ST2

調査区中央西寄りに位置する。西側のP8・P9がSB1を掘り込んでいるが、調査時は重複に気付かずSB1を先行して掘削したため、P9は柱材、P8は掘り込み底面が検出されたのみである。また、同様の理由で本来あるべき西隅の柱穴は検出できていない。

平面形は梁行2間、桁行3間で、北西

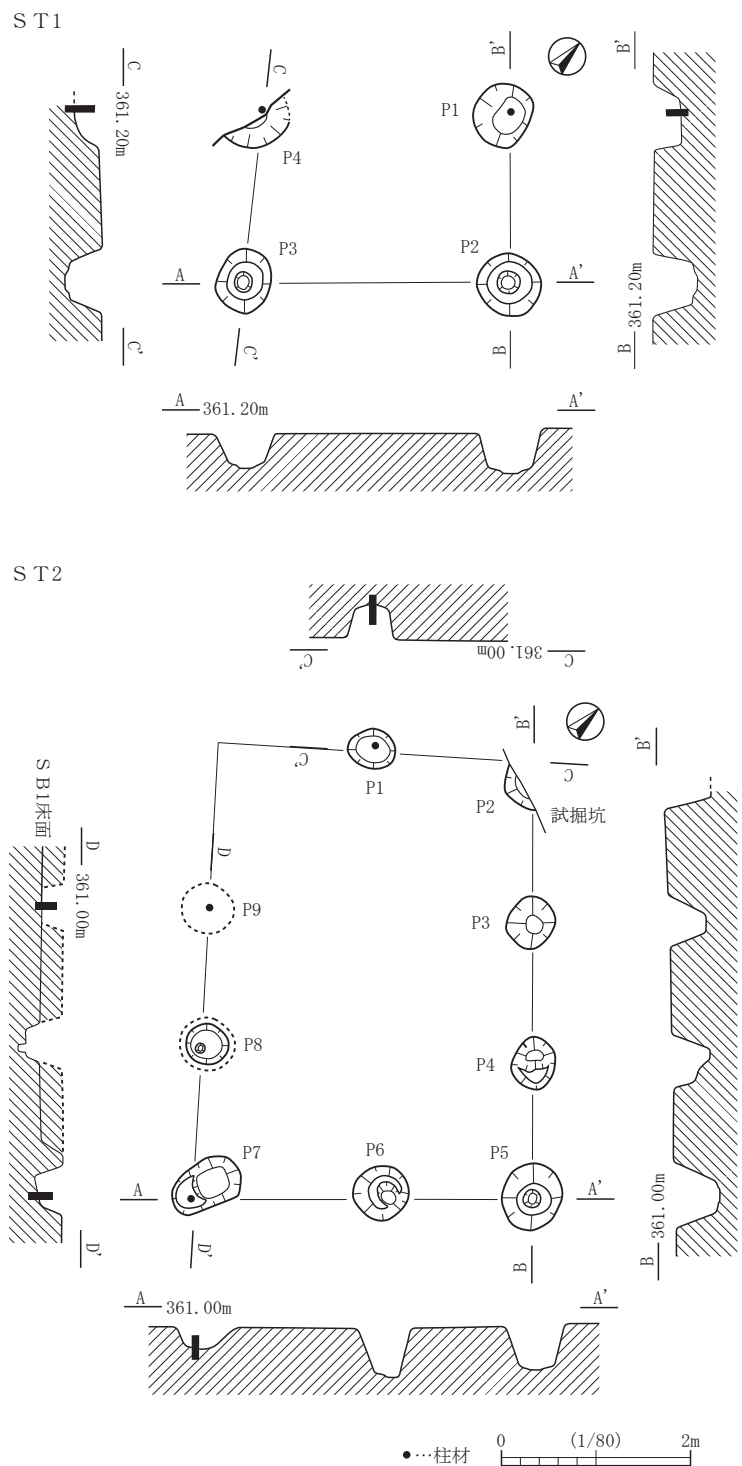


図13 ST1・ST2実測図

辺の配列はやや乱れる。遺存した柱材や柱痕から、規模は長辺 4.72 ～ 4.92 m、短辺 3.61 m を測る。

本遺構の時期は、切り合い関係から弥生時代後期後半以降と判断されるが、出土した土器がごく少量であり、特定が困難である。

ST 3

調査区中央北西寄りに位置する。整理調査の段階で柱穴配列より設定した。SD 2 と重複するものの、掘り込みに切り合い関係がなく、先後関係は明らかではない。平面形は 2 間 × 2 間であるが、西辺中央の柱穴は検出できていない。規模は東西 3.32 m、南北 3.75 m を測る。

本遺構の時期は、出土した土器がごく少量であり特定が困難である。

ST 4

調査区中央南寄りに位置する。整理調査の段階で柱穴配列より設定した。4 箇所の柱穴からなる柱穴列であるが、いずれからも柱材もしくは柱痕が検出されており、掘立柱建物の一部と判断した。現況から桁行 3 間以上、長さ 5.3 m 以上の建物が推定される。調査区中央部は特に遺構の認識が難しかったことから、未検出の柱穴は西側にあるものと予想する。

時期については、出土遺物が少なく不明である。

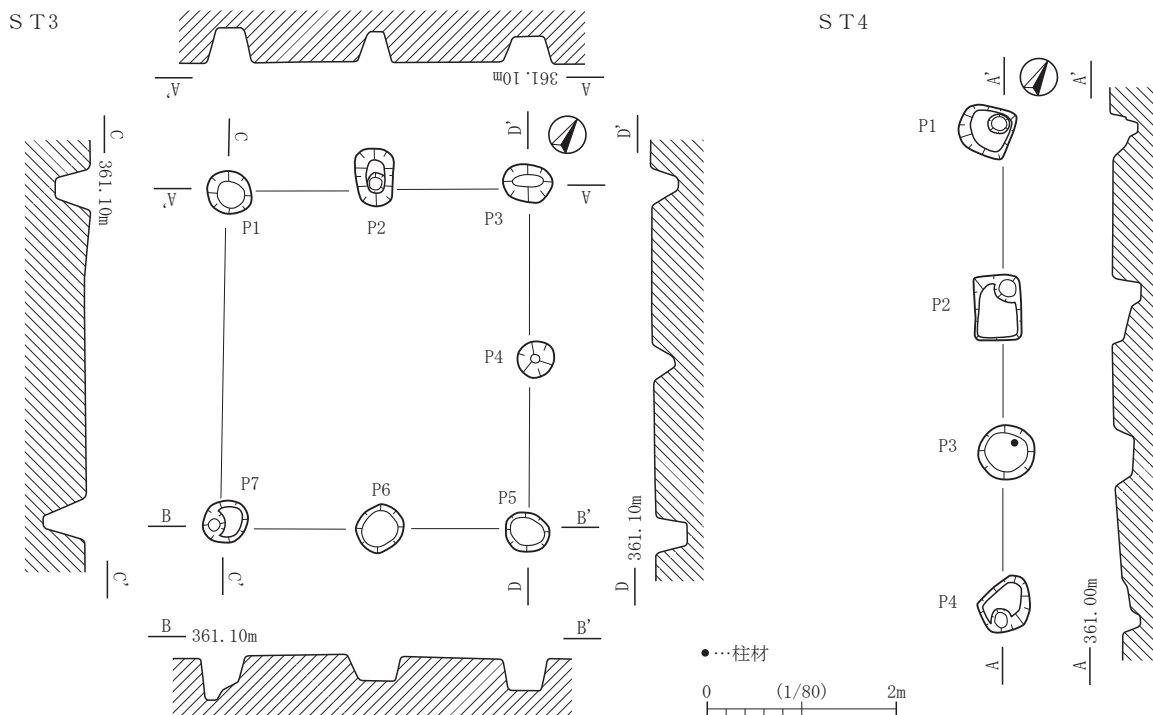


図 14 ST 3・ST 4 実測図

SK 1

調査区北西隅に位置する。西側が調査区外にあり、全容は明らかではない。ST 1 P 4 に掘り込まれているが、検出時に重複を認識できずに両遺構を同時に掘削している。検出範囲内での平面形は不整長方形を呈し、幅は 1.41m を測る。遺構中央部は円弧を描いて深く掘り込まれており、断面には段が生じている。確認面から最深部までの深さは 30cm である。

遺物は弥生土器を主体に 2,775g の土器が出土し、このうち壺 (1～3・9)・甕 (4～8・10・11) を図示した。接合関係のない破片も含め、大部分が覆土上層に集積した状態で検出された。ある程度の形状を残すものの全形を把握しうるものはなく、埋没途中の土坑内に破損品が投棄された状況と想定される。1～3 は口縁部から頸部

にかけて残存する。頸部に文様帯を有し、ヘラ状工具による多条の横走沈線文をベースに、充填縄文(2)・山形文(2・3)が施される。口縁部は2・3が大きく外反してラッパ状を呈するのに対し、1は緩やかに内湾して受口状を呈し、注口を1箇所設ける。1の口唇部には縄文とみられるわずかな凹凸が観察されるが、器面の磨耗が著しく図化は断念した。甕の口縁部は、受口を呈する4と、短く外反して口唇部に刻目を施す5・6がある。4は外面に二重の山形文がヘラ状工具により施される。地文の縄文は磨耗が著しく確認できない。口唇部は平坦に仕上げられ、やや内傾する。

本遺構の所属時期は、出土遺物より弥生時代中期後半と判断される。

SK 5

調査区南東に位置し、SB 2を掘り込んで構築される。平面形は不整形円形を呈し、規模は長径92cm、短径83cmを測る。確認面から最深部までの高さは18cmである。覆土は黒色粘質土(2.5Y 1/1)の単一土層で礫を少量含む。

本遺構の時期は、切り合い関係から弥生時代中期後半以降

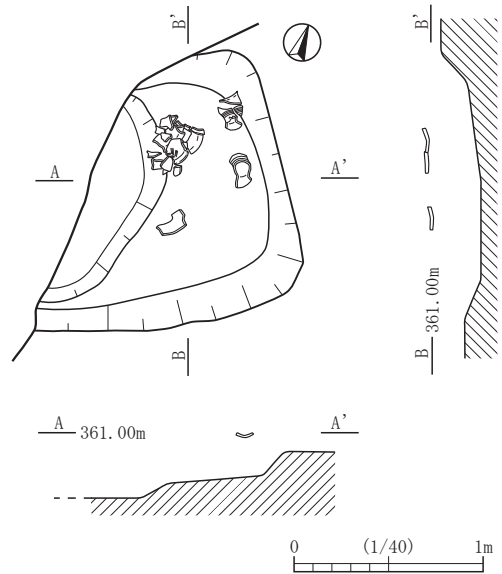


図 15 SK 1 実測図

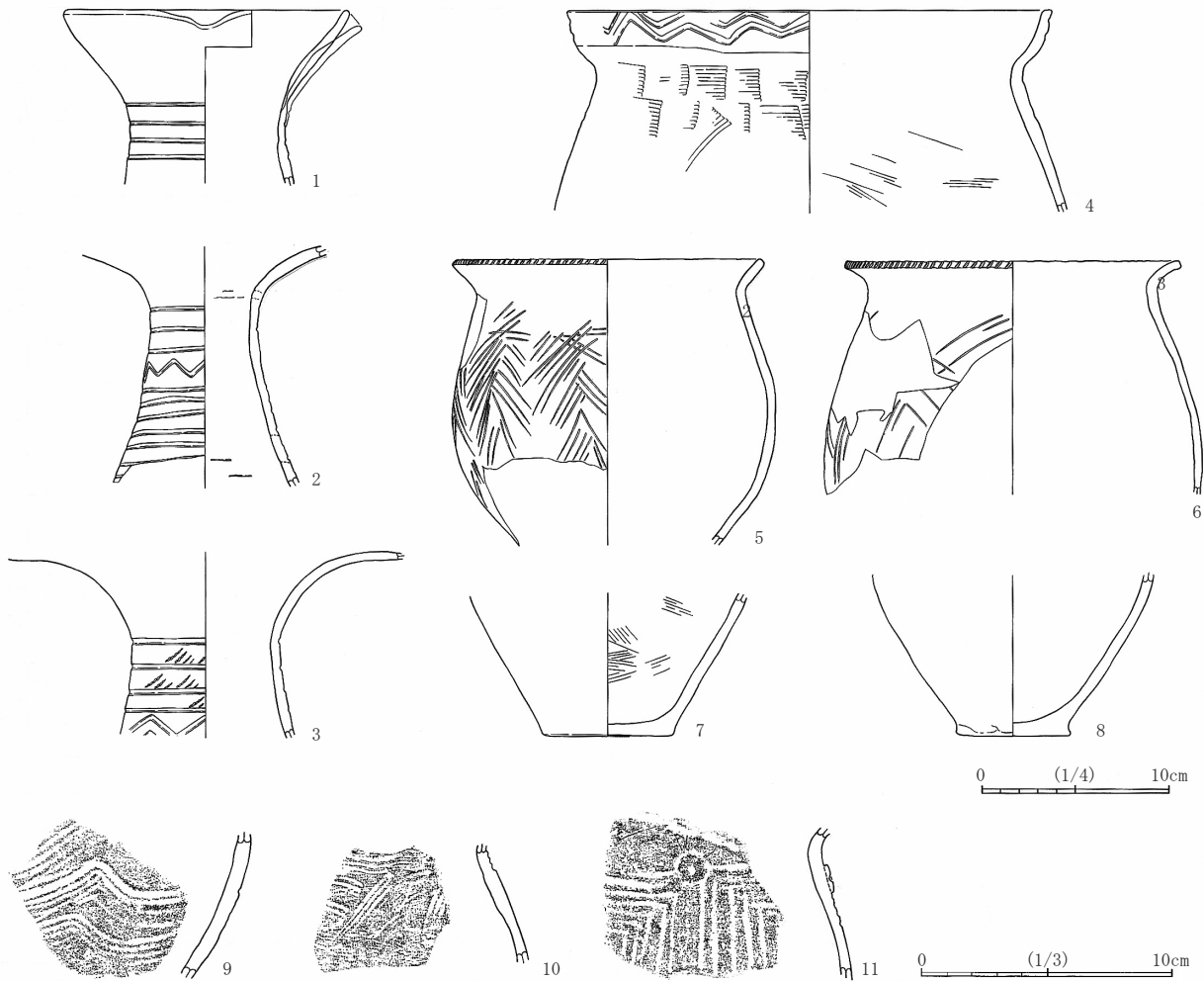


図 16 SK 1 出土遺物実測図

と判断されるが、出土した土器が少量であり、特定は困難である。なお、周囲には同じ規模・覆土を有する土坑が4基確認されており（SK 2～4・12）、本遺構はこれらと同時期に存在していた可能性が高い。

SK 6

調査区中央北寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ2.04m、幅1.20mを測る。確認面から最深部までの深さは31cmである。遺構確認時は平面形態から土坑墓の可能性を考えたが、調査の結果木棺の痕跡など墓と判断する積極的な根拠が認められなかったことから、通常の土坑として報告するものである。

図示しうる出土遺物はないが、弥生時代中期後半の土器が主体を占めており、該期の遺構と判断される。

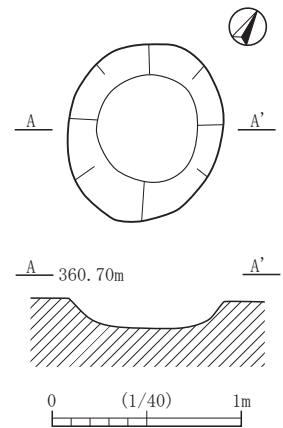


図17 SK5実測図

SD 1

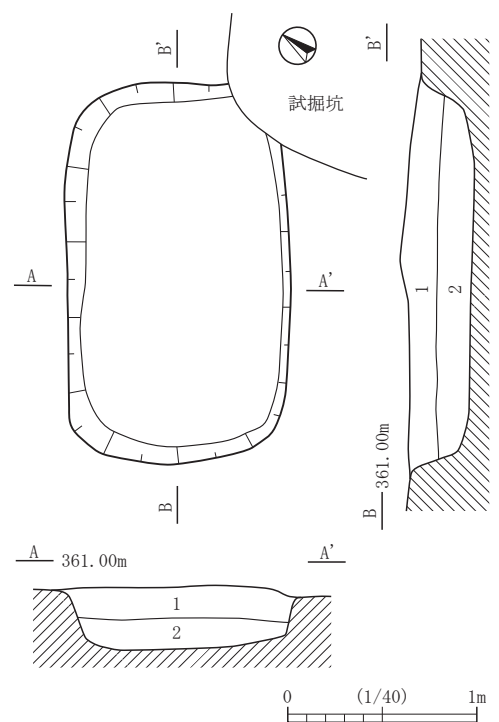
調査区南西隅に位置する。北西 - 南東方向の直線的な溝で、両端は調査区外に延びる。規模は確認長5.27m、幅100～129cmで、確認面からの深さは17cmを測る。

図示しうる遺物はないが、出土土器の主体を占めるのは奈良時代に比定される土師器・須恵器であり、該期の遺構と判断される。

SD 2

調査区中央北西寄りに位置する。ST 2と重複するが、掘り込みに切り合い関係がなく、先後関係は不明である。南西 - 北東方向に直線的に延び、規模は確認長10.56m、幅37～83cmを測る。

図示しうる遺物はないが、出土土器の主体を占めるのは奈良時代に比定される土師器・須恵器であり、該期の遺構と判断される。



- 1、黒色土（10YR 1.7/1）φ1～5cmの円礫を含む
- 2、黒褐色粘質土（10YR 2/2）＋黒褐色砂質土（2.5Y 3/2）φ1～10cmの円礫を含む

図18 SK6実測図

SD 3

調査区東に位置する。南北方向の溝で両端は調査区外に延びる。規模は確認長11.35m、幅78～209cmで、確認面からの深さは39cmを測る。

遺物は遺構中央部で集中的に出土した。主体を占めるのは土師器・須恵器で、総量は8,200gを計る。このうち図示したのは、須恵器の蓋（1・2）・杯（3～5）・横瓶（6）・甕（7）・鉢（11）、土師器の甕（8）・盤（9）、内耳土鍋（10）である。2は復元径17.2cmを測り、器高が比較的低い。口縁部はわずかに外開し、外面の回転ケズリは屈曲部付近まで丁寧に行われる。杯には有台の3・4と無台の5がある。3・4の底部切り離しはヘラ起こしで、のちに回転ケズリを施す。底部はともに下方に膨れ気味で、3は中央が高台接地面とほぼ同じ高さである。5の底部切り離しも有台杯同様にヘラ起こしで行われ、最終調整に粗いケズリを行う。褐色を呈する焼成不良の個体である。段掘り中段の比較的浅い床面から出土した。6は別作りした口縁部と体部の接合部分で、内外面に補充粘土が観察される。7は遺構中央の覆土中より多量の人頭大の礫と共に押し潰されたような状態で出土した。焼成はやや軟質で、胎土に白色の砂粒を多く含む。胴部の調整は外面が平行タタキ、内面が粗い工具ナデで

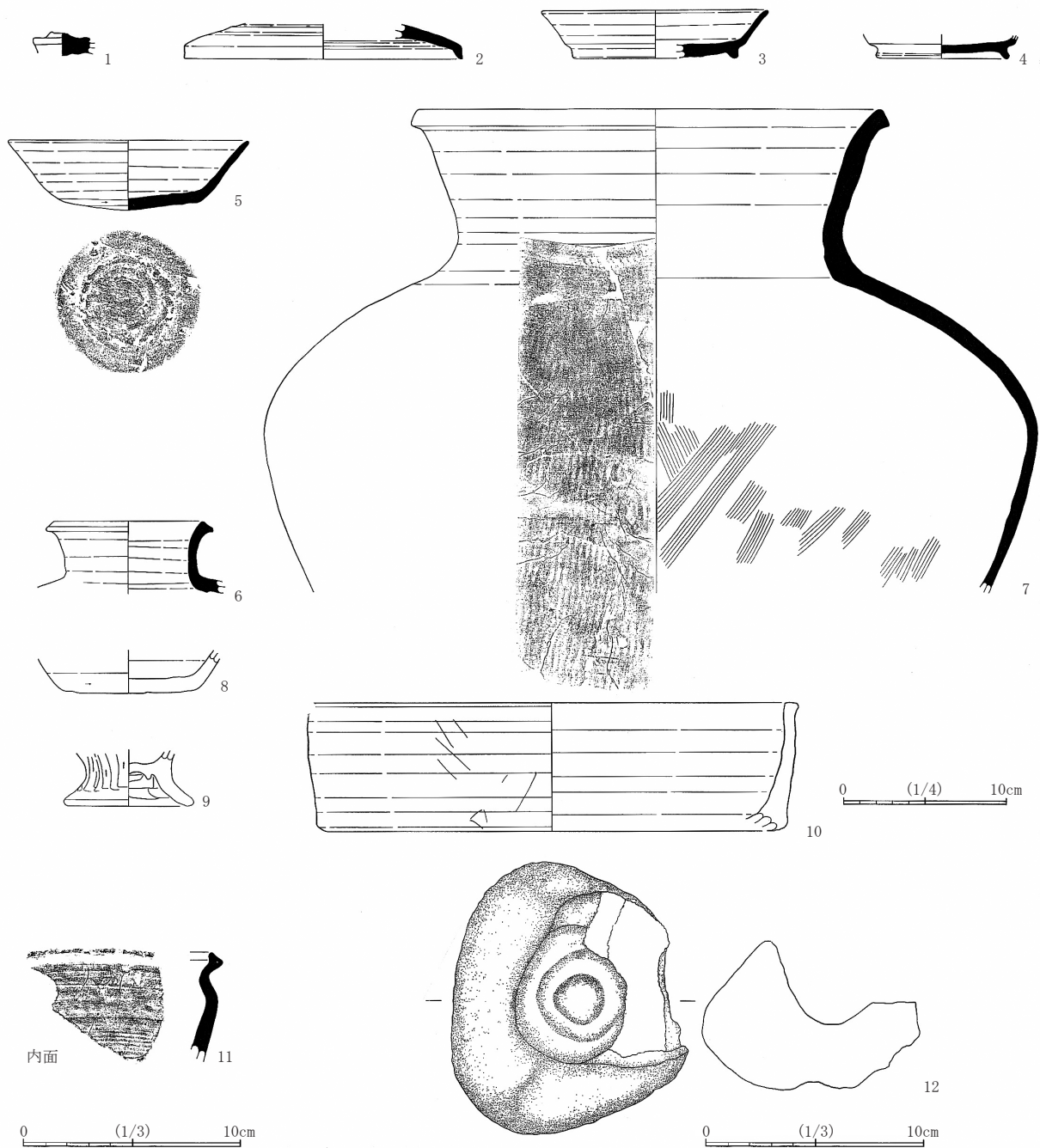


図 20 SD 3 出土遺物実測図

ある。10 は本調査で確認された唯一の中近世遺物である。焙烙形を呈し 16 世紀頃の所産と推定される。他の出土遺物と時期差が大きく、本遺構に直接伴う遺物とは考えにくい。このほか、石製品のくぼみ石 (12) が、7 の周辺に散在する石群に混じって出土した。安山岩製で両面にくぼみが認められる。一部欠損し、重量は 3,050g を計る。このほか破片資料として、古墳時代後期とみられる器種不明の黒色土器片や、底部に糸切り痕が残る平安時代の須恵器片が少量認められる。

本遺構の所属時期は、出土遺物より奈良時代後半と判断される。

SD 4

調査区中央北東寄りに位置する。東に円弧を描く南北方向の溝で、規模は長さ 7.88 m、幅 32 ~ 90cm、確認面からの深さは 30cm を測る。

時期については、出土遺物が少なく不明である。

遺構外出土遺物

重機掘削および遺構検出時に出土した遺物を遺構外出土遺物として一括して報告する。5・1は弥生土器で、5が中期後半の甕、1は後期後半の甕である。5は口縁部が短く外反し、口唇部に刻目、頸部には等間隔止簾状文が施文される。2～4は須恵器の杯で、2が無台、3・4が有台である。いずれも回転台からの切り離しはヘラ起こしにより行われ、奈良時代の所産と思われる。6は土師器の把手で、古墳時代の甗の一部と考えられる。

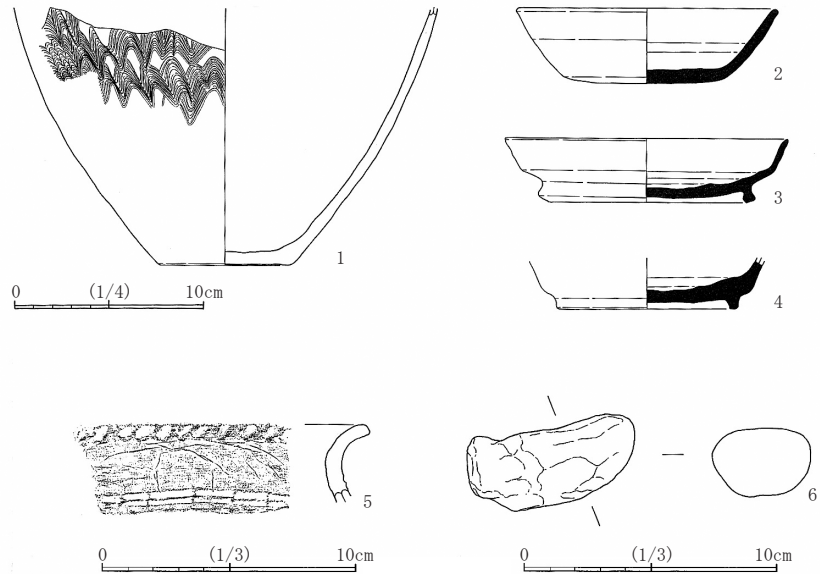


図 21 遺構外出土遺物実測図

表 3 出土土器観察表

図	No.	遺構	層位	種別	器種	遺存	色調	調整	文様・特徴
10	1	SB1	覆土	弥生	甕	1/3	暗褐	外面:ミガキ、内面:ハケ→ミガキ	口縁部・胴部:櫛描波状文、頸部:3連止簾状文
10	2	SB1	床面	弥生	甕	1/1	黒褐	外面:ハケ、内面:口縁部:横ナデ、頸部:ハケ、胴部:ミガキ	口縁部・胴部:櫛描波状文、頸部:2連止簾状文
10	3	SB1	床面	弥生	甕	1/4	灰黄褐	内面:ミガキ	口縁部・胴部:櫛描波状文、頸部:等間隔止簾状文
10	4	SB1	覆土	弥生	壺	-	にぶい黄橙		肩部:円形浮文・T字文(2条)
12	1	SB2	覆土	弥生	壺	1/4	にぶい黄橙	外面:ハケ→横ミガキ 内面:ハケ→ナデ 底面:ナデ	黒班
12	2	SB2	覆土	弥生	台付甕	1/1	褐灰	外面:ハケ→横ミガキ、内面:ミガキ、底面:ハケ	
12	3	SB2	覆土	弥生	鉢	1/4	灰黄褐	外面:横ミガキ、内面:ミガキ、底面:ナデ	内外面赤色塗彩
12	4	SB2	覆土	弥生	壺	-	にぶい黄橙		頸部:横走沈線文・押し列点文・山形文
12	5	SB2	覆土	弥生	壺	-	灰褐		胴部:横走沈線文・連弧文
12	6	SB2	覆土	弥生	甕	-	にぶい黄橙		胴部:「コ」の字重ね文
16	1	SK1	覆土	弥生	壺	3/4	にぶい橙	外面:ミガキ、内面:ミガキ	頸部:横走沈線文、(口唇部:縄文)、注口
16	2	SK1	覆土	弥生	壺	4/5	灰黄褐	外面:不明、内面:工具ナデ・接合痕、器面磨耗	頸部:横走沈線文・山形文
16	3	SK1	覆土	弥生	壺	1/1	にぶい黄橙	外面:ミガキ、内面:ミガキ	頸部:横走沈線文→充填縄文、重山形文
16	4	SK1	覆土	弥生	甕	1/4	黄灰	外面:ハケ、内面:ハケ、器面磨耗	口縁部:山形沈線文 頸部:等間隔止簾状文(2段)
16	5	SK1	覆土	弥生	甕	3/4	橙	器面磨耗	口唇部:刻目、胴部:縦羽状文
16	6	SK1	覆土	弥生	甕	1/2	にぶい黄橙	器面磨耗	口唇部:刻目、胴部:縦羽状文
16	7	SK1	覆土	弥生	甕	1/1	明褐灰	外面:ミガキ、内面:ハケ→ナデ?、底面:ケズリ、器面磨耗	黒班
16	8	SK1	覆土	弥生	甕	1/2	明赤褐	外面:ナデ、内面:ナデ、底面:ケズリ	
16	9	SK1	覆土	弥生	壺	-	にぶい黄橙		胴部:連弧文
16	10	SK1	覆土	弥生	甕	-	にぶい黄橙		頸部:等間隔止簾状文、胴部:縦羽状文
16	11	SK1	覆土	弥生	甕	-	にぶい黄橙		胴部:円形浮文・コの字重ね文
20	1	SD3	覆土	須恵	蓋	1/1	赤褐	回転ナデ	つまみ
20	2	SD3	覆土	須恵	蓋	1/5	にぶい黄橙	回転ナデ、外面:回転ケズリ	
20	3	SD3	覆土	須恵	杯	1/4	灰	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→回転ケズリ/高台補充粘土	有台
20	4	SD3	覆土	須恵	杯	1/1	灰	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→回転ケズリ	有台
20	5	SD3	床面	須恵	杯	1/3	褐灰	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→ケズリ	無台
20	6	SD3	床面	須恵	横瓶	1/1	灰	回転ナデ、内外面に補充粘土	
20	7	SD3	床面	須恵	甕	3/4	灰	回転ナデ、外面:平行タタキ、内面:工具ナデ	
20	8	SD3	覆土	土師	甕	1/2	にぶい黄橙	外面:横ケズリ、内面:回転ナデ、底部:ケズリ	
20	9	SD3	覆土	弥生	盤	2/3	褐灰	外面:縦ケズリ、内面:ケズリ、脚台内面:ケズリ	
20	10	SD3	覆土	内耳	鍋	1/12	にぶい黄橙	回転ナデ	
20	11	SD3	覆土	須恵	鉢	-	褐灰	回転ナデ、内面:カキメ	
21	1	包含層		弥生	甕	1/4	にぶい黄橙	外面:縦ミガキ、内面:工具ナデ、底部:ミガキ	胴部:櫛描波状文
21	2	北壁		須恵	杯	1/2	灰	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→ケズリ	無台
21	3	包含層		須恵	杯	1/2	灰黄褐	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→回転ケズリ	有台、接着不良
21	4	検出面		須恵	杯	1/2	暗青灰	回転ナデ、底部:ヘラ起こし→回転ケズリ	有台
21	5	検出面		弥生	甕	-	褐灰		口唇部:刻目、頸部:等間隔止簾状文
21	6	重機		土師	甗	1/1	にぶい黄橙		把手

第Ⅳ章 まとめ

調査地周辺の微地形や開発に伴い実施された試掘調査のデータを基に、中越遺跡の範囲を想定した（図 22）。中越遺跡は、東部中学校から芋井森中古衣神社にかけて南北に延びる微高地上に展開すると考えられ、2015年の調査（長野市教育委員会 2016、以下、JA分譲地地点）、および北陸新幹線建設に伴う調査（（財）長野県埋蔵文化財センター 1998、以下、新幹線地点）の成果から、弥生時代中期後半から中近世にかけての集落遺跡と把握される。隣接遺跡との区分は微地形および検出遺構の内容から可能と考えるが、現状で検討材料が不足している北部は既知の東部中学校遺跡を暫定的に含め、境界の想定は保留する。以下、主要遺構の分布から各時期の様相を概観し、本報告のまとめとする。なお、検出遺構が僅少であった中近世については対象から除外した。

弥生時代中期後半の遺構は南西部のJA分譲地地点西側と調査地で確認された。いずれも石川日出志による栗林式土器編年（石川 2002）の2式新段階に相当する土器が出土しており、単一時期の小規模集落と推定される。弥生時代後期後半の遺構は調査地・新幹線地点W9区・同W10B区で検出された。住居跡は全域に分布し、特に北東部に濃密である。いわゆる「国鉄貨物基地遺跡」から出土した土器は青木一男の後期土器編年（青木 1999）で5期に相当するが、発掘調査では4期に遡る土器も多くみられ、3～4世代の集落存続期間が想定できる。古墳時代前期は新幹線地点W10A区で周溝墓が検出された。中央部が墓域であったとみられ、周辺には居住域の存在が予想される。新幹線地点W9区1の該期集落はその候補である。古墳時代後期から平安時代までの遺構分布状況は概ね一致し、西部のJA分譲地地点西側・新幹線地点W9区2・同3・同き電所地点に集中している。報告書には6世紀後半から10世紀中葉にかけての年代が示されており、古墳時代後期以降は継続的に集落が営まれているようである。

引用・参考文献

青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年（発表メモ）」『長野県の弥生土器』長野県考古学会弥生部会

石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100

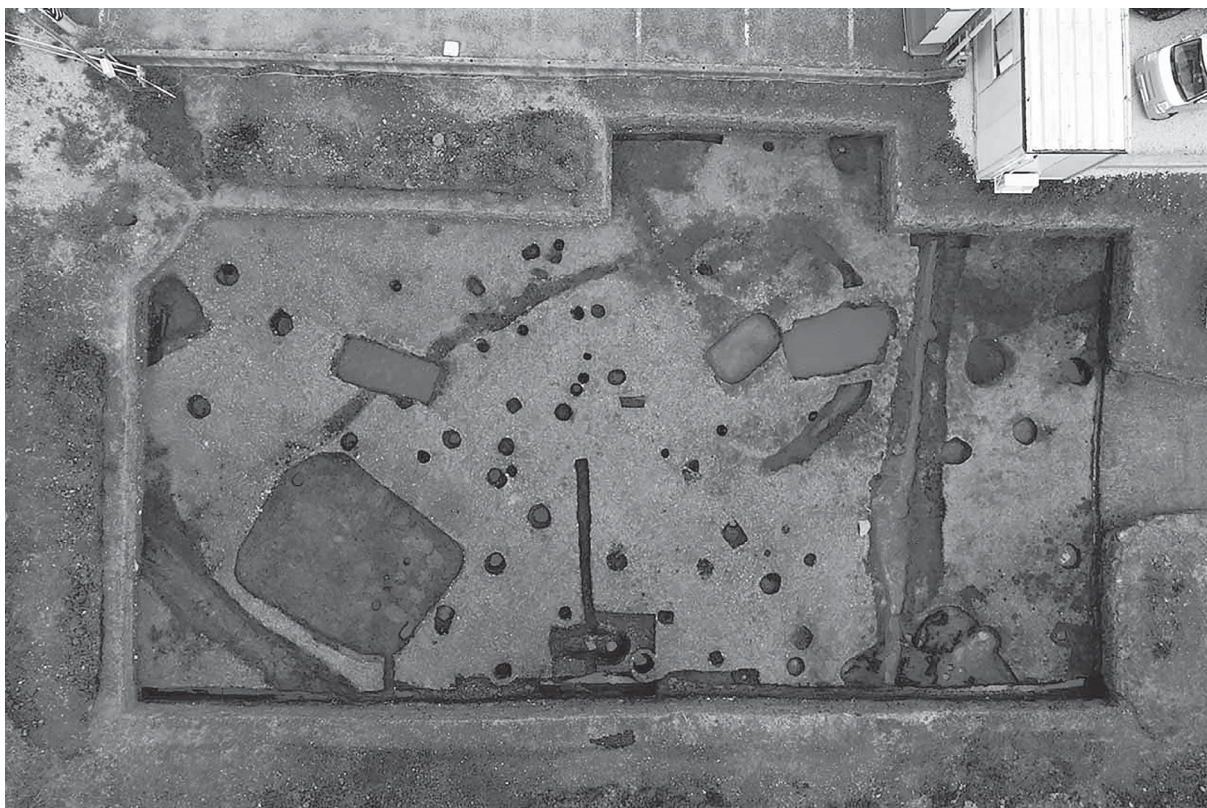
（財）長野県埋蔵文化財センター 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その2—浅川扇状地遺跡群・三才遺跡群』長野市教育委員会 2016『中越遺跡』長野市の埋蔵文化財第146集



図 22 中越遺跡の想定範囲



調査地遠景（東より）



調査区全景

写真図版



SB 1 (南東より)



SB 1 炭化材出土状況 (東より)



SB 1 土器出土状況 (南西より)



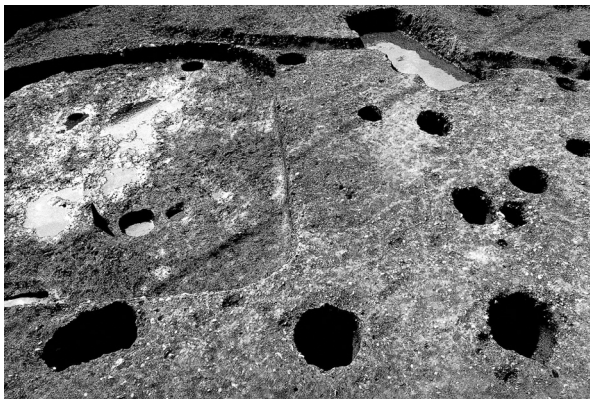
SB 2 (北西より)



SB 2 炭化材出土状況 (東より)



ST 1 (南東より)



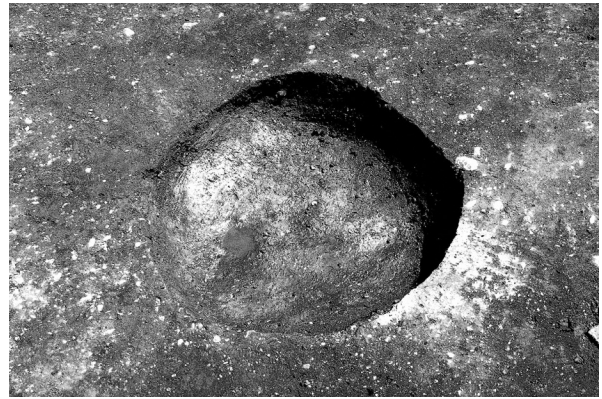
ST 2 (南東より)



SK 1 (北東より)



SK 1 土器出土状況 (北東より)



SK 5 (北西より)



SK 6 (南西より)



SD 1 (南東より)



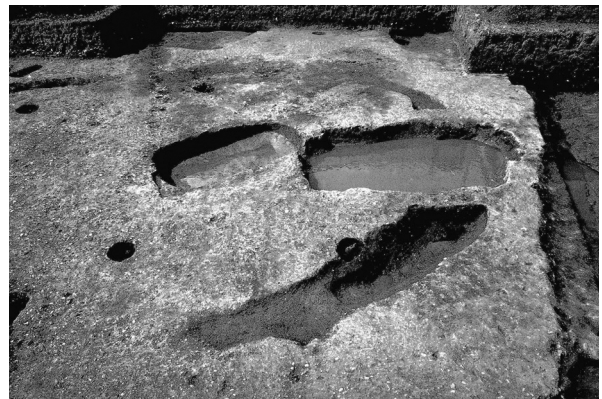
SD 2 (南東より)



SD 3 (南より)



SD 3 土器出土状況 (北西より)



SD 4 (南より)

写真图版



浅川扇状地遺跡群

徳間番場遺跡 (2)

東邦ピュアタウン徳間3号地駐車場等造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

例 言

- 1 本報告は、民間開発事業「東邦ピュアタウン徳間3号地駐車場等造成工事」に伴い実施した緊急発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、開発事業者である個人と、長野市長 加藤久雄 との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結して実施した。調査業務は長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が履行した。
- 3 調査地は長野市大字徳間字番場 545-8 に所在する。調査面積は 36㎡である。
- 4 発掘調査は平成 28 年 8 月 29 日から 9 月 7 日までの 10 日間実施した。
- 5 本報告の編集及び執筆は飯島哲也の指導の下、高津希望と篠井ちひろが担当した。執筆分担は第 I 章第 1 節を飯島、第 II 章第 2 節第 1 項を篠井、上記以外を高津が担当した。
- 6 遺構写真、遺物写真は高津が撮影した。
- 7 出土遺物及び調査の諸記録は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。なお、遺物注記や諸記録、標題としての調査の略記号は「ATT3」を用いた。

凡 例

本報告は、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系の座標値（日本測地系 2011）と日本水準原点の標高を基準とする。
- 2 遺構図は、現地にて 1/20 の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に 1/40 の縮尺で掲載している。
- 3 検出した遺構の略記号については、溝跡・河川跡は SD、土坑は SK、小穴は SP とした。
- 4 土坑・小穴の基準については、長軸が 70cm 以上のものを土坑（SK）とし、それ未満のものは小穴（SP）とした。
- 5 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、1/4 の縮尺で掲載している。

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査の契機と事務経過

調査地周辺は長野市の中心市街地より北東約 5km に位置し、かつては豊かな田園地帯であったが、1987（昭和 62）年度から着工された稲田徳間土地区画整理事業により、広大な農地が郊外型の住宅密集地へと変貌した。そして長野市立徳間小学校の北西一帯に残された田畑において、民間開発業者による総事業面積約 2.6ha に及ぶ大規模な宅地造成工事が計画され、長野市教育委員会が平成 27 年度に埋蔵文化財発掘調査を実施した。

その区画造成地内の一宅地である今回の開発行為に関して、埋蔵文化財の取り扱いに関する照会を受けたのは 2016（平成 28）年 1 月 29 日のことである。当該区画は、通常の個人住宅程度の基礎掘削では遺物包含層及びその保護層には影響が出ない程度の盛土が施されているものの、駐車場部分に関しては道路面まで切土したいとの開発事業主体者である施主の強い意向により、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

2016（平成 28）年 7 月 1 日付で文化財保護法第 93 条の規定に基づく届出が開発事業主体者から提出され、同日付で「発掘調査依頼書」と「土地所有者の承諾書」も提出され、どちらも受理した。同年 7 月 11 日付 28 埋第 2-99 号にて、埋蔵文化財の保護措置として「発掘調査」を指示している。その後、8 月 5 日付で発掘調査委託契約書を締結し、発掘調査は 8 月 29 日より着手し 9 月 7 日までの 10 日間で終了した。なお、発掘調査で使用する重機等機材の賃貸借については、調査に要する経費を少しでも抑えたいという開発事業主体者の意向により、使用する機材の現物を提供していただくことにより確保した。その後、継続して発掘調査報告書作成のための整理調査を実施して本書を刊行し、当該開発事業における埋蔵文化財の保護措置は完了した。



図 1 調査地位置図

第2節 調査日誌抄

- | | | | |
|-------|-------------------------------|------|---|
| 8月29日 | 重機による表土掘削作業を開始する。
調査機材を搬入。 | 9月5日 | 各遺構の掘り下げ作業継続。 |
| 8月30日 | 表土掘削作業をするも、降雨により
1時間で作業中断。 | 9月6日 | 各遺構の掘り下げ作業を完了。
全体・個別写真撮影を実施する。
遺構測量（委託）を実施する。 |
| 8月31日 | 表土掘削作業完了。 | 9月7日 | 測量成果に基づき遺構図を作成。
調査機材を撤収。 |
| 9月1日 | 作業員による遺構検出作業に着手。 | | |
| 9月2日 | 遺構検出作業を完了。
以降、順次遺構調査を実施する。 | | 現地における全ての作業を完了する。 |

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
統括管理者	文化財課	課長	青木 和明
調査機関	埋蔵文化財センター	主幹兼所長	森山 正美
		課長補佐	飯島 哲也（調査担当者）
		庶務担当係長	竹下 今朝光
		職員	宮崎 千鶴子
		調査担当係長	風間 栄一
		主事	小林 和子
		研究員	高津 希望（主任調査員）、篠井 ちひろ（調査員） 清水 竜太、遠藤 恵実子、田中 暁穂、日下 恵一 鈴木 時夫
発掘作業員	大谷 盛孝、金子 ポンティプ、塩入 洋子、田原 次郎、峯山 真由美、山本 光洋		
整理調査員	青木 善子、鳥羽 徳子、武藤 信子		
整理作業員	清水 さゆり、関崎 文子、西尾 千枝、待井 かおる、三好 明子		
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所		

なお、発掘調査の実施に伴い必要となる掘削用の重機やテント等の機材については、開発事業者から現物提供を受けた。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

中央高地北部に位置する長野市は、長野盆地、通称善光寺平と、その東西両縁を画する東部山地並びに西部山地で構成される。長野盆地を縦貫する千曲川の左岸域には、西部山地を開析して流れ込む支流諸河川、犀川・裾花川・浅川などの堆積作用によって扇状地形が発達しており、このうち最も北側に位置するのが浅川扇状地である。飯縄山を水源とする浅川は、中曽根集落のある山間部を侵食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として長野盆地内に流入し、南東方向へなだらかに傾斜する典型的な大規模扇状地を形成する。南は城東小学校付近で裾花川扇状地と接し、先端は東方へ伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地に接する。また、左翼は三才断層による若槻・豊野丘陵に接する。浅川扇状地の形成は古く、その後も扇頂側の扇状地面は浅川や駒沢川によって開析される。この土砂が徳間・稲田周辺に堆積して新たな緩勾配の扇状地を形成する。

調査区が所在する徳間は、北に駒沢川が、南に浅川が流下している。調査地周辺は近年まで多くの水田が広がっており、浅川流域の微高地には畑地・桑畑などが営まれていた。1987（昭和62）年に着工された事業面積約45haにおよぶ「長野市稲田徳間土地区画整理事業」により大規模な造成がなされ、現在では整然と区画された住宅地へと姿を変えている。遺跡は扇状地内の微高地に展開するものと想定されるが、現況では造成区画の高低差でしか旧地形を窺うことはできない。



図2 調査地周辺の旧地形

第2節 歴史的環境

(1) 徳間番場遺跡の調査歴

徳間番場遺跡では、平成27年度に徳間分譲地造成工事に伴い発掘調査を実施している。本書で報告する駐車場等造成地点は、徳間分譲地造成工事地点の保護対象地に含まれていた。発掘調査を行った開発道路部分(4区)北隣に位置し、同調査の際に盛土による現状保存がなされている。

徳間分譲地造成工事地点の調査では、弥生時代中期後葉から後期、奈良時代、中世の遺構と遺物を確認した。検出した遺構は堅穴住居跡2軒・溝跡9条・土坑24基等で、遺構の主体を溝跡・土坑が占めている。また、調査面積2233.7㎡に対して遺構・遺物ともに少なく、同地点は集落外縁部に当たるものと判断し得る。

堅穴住居跡は2軒とも前述の4区において検出しており、弥生時代中期後葉から後期の年代が当てられる。このほか、4区では同時期の溝跡1条および土坑を検出しており、該期の集落が形成されていたことが窺える。溝跡(SD1)を境に、4区南側には遺構・遺物が分布していないことから、集落の中心部は本調査地を含む徳間分譲地造成工事地点の北側に展開する可能性が高い。(長野市教育委員会2016)

(2) 周辺の遺跡

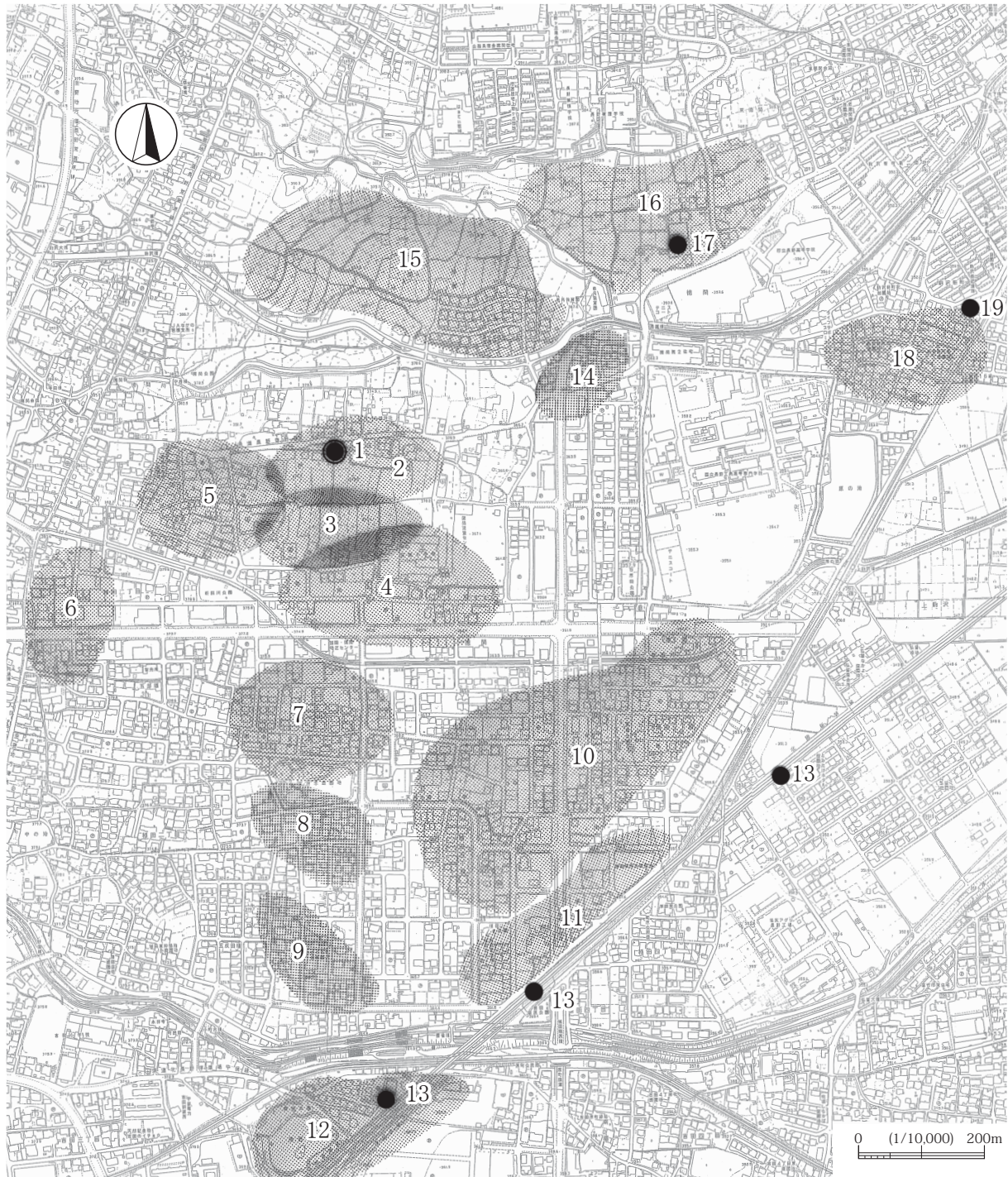
千曲川の支流である浅川の堆積作用により形成された扇状地には、縄文時代前期以降、各時代の集落遺跡が密に分布しており、市内有数を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。本項では浅川扇状地遺跡群の様相について、徳間番場遺跡が所在する若槻地区を中心に概観する。なお、図3に示した各遺跡の範囲は現状で想定している範囲である。

徳間中南遺跡(図3-3) 前述の徳間番場遺跡と同様、平成27年度に徳間分譲地造成工事に伴い発掘調査を実施した。弥生時代中期後葉の堅穴住居跡1軒を検出したほか、時期不明の堅穴住居跡1軒、弥生時代中期後葉および奈良～平安時代の溝跡・土坑・小穴等を検出している。集落外縁部と想定でき、近接する徳間柳田遺跡や本堀遺跡との関係が窺われる。また、素掘りの井戸跡とみられる土坑からは栗林式土器と共に木製の組合鋤が出土した。(長野市教育委員会2016)

徳間柳田遺跡(図3-4) 最初の調査は、昭和54年度の徳間小学校建設に伴う発掘調査であり、弥生時代中期～平安時代の堅穴住居跡3軒と、溝跡や土坑が確認された。その後、稲田徳間土地区画整理事業に伴う発掘調査が昭和63年度から平成2年度にかけて3次にわたって実施されている。その際には、弥生時代中期～平安時代の堅穴住居跡12軒・掘立柱建物跡7棟・溝跡・土坑等が検出された。(長野市教育委員会1980・1992)

稲添遺跡(図3-6) 徳間柳田遺跡と同じく、稲田徳間土地区画整理事業に伴って昭和63年度から平成2年度にかけて3次にわたる発掘調査が実施された。堅穴住居跡は検出されず、古墳時代前期～中世の溝跡・土坑・井戸跡が検出された。古墳時代の井戸跡は2基あり、そのうちの1基からは多量の土器が出土しており、井戸の廃絶に伴う祭祀の可能性が示唆される。(長野市教育委員会1992)

本堀遺跡(図3-7) 徳間柳田遺跡・稲添遺跡と同様の稲田徳間土地区画整理事業、並びに準用河川新田川改修事業に伴って3次にわたる発掘調査が実施された。稲田徳間土地区画整理事業地点では弥生時代中期の堅穴住居跡3軒・溝跡2条、古墳時代の堅穴住居跡2軒・溝跡1条、時期不明の掘立柱建物跡4棟が検出された。新田川改修事業地点では縄文時代の土坑1基、平安時代の堅穴住居跡1軒・土坑3基・溝跡1条が検出されている。(長野市教育委員会1992)



1. 徳間番場遺跡（調査地） 2. 徳間番場遺跡 3. 徳間中南遺跡 4. 徳間柳田遺跡 5. 徳間榎田遺跡 6. 稲添遺跡
 7. 本堀遺跡 8. 天神木遺跡 9. 樋爪遺跡 10. ニツ宮遺跡 11. 権現堂遺跡 12. 辰巳池遺跡
 13. 浅川扇状地遺跡群（北陸新幹線地点） 14. 三反田遺跡 15. 徳間古屋敷遺跡 16. 徳間本堂原遺跡 17. 本堂原1号古墳
 18. 駒沢新町遺跡 19. 駒沢祭祀遺跡

図3 周辺の遺跡

天神木遺跡（図3-8）稲田南土地区画整理事業に伴って平成10年度から11年度に発掘調査が実施される。検出された遺構は、弥生時代中期の土坑1基、中世の大溝跡・井戸跡2基・小穴、帰属時期不明の竪穴状遺構2基・溝跡等である。大溝跡は最大幅3.6m、深さ0.8mを測り、北西から南東方向へ蛇行する。溝跡の形態などから流路・排水機能を備えた区画溝跡と想定されている。（長野市教育委員会2004）

樋爪遺跡（図3-9）天神木遺跡と同じく稲田南土地区画整理事業に伴って平成10年度から11年度に発掘調査が実施された。弥生時代の竪穴住居跡4軒・溝跡・土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒・溝跡・土坑、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒・溝跡・土坑、奈良時代の竪穴住居跡1軒・溝跡が検出されている。このうち、古墳時代前期の溝跡で二重または三重に巡る「コ」の字状を呈するものが検出された。性格は不明だが、溝の内側の小穴群とかかわる周溝の可能性もある。また古墳時代中期の土坑の一つでは高杯・甕を主体とする破片が投棄された状態で出土しており、祭祀遺構の可能性が高い。（長野市教育委員会2004）

二ツ宮遺跡（図3-10）これまでに5次にわたる発掘調査が実施されている。1次から3次調査は稲田徳間土地区画整理事業並びに準用河川新田川改修事業に伴って、昭和63年度から平成2年度にかけて発掘調査が実施された。竪穴住居跡133軒、溝跡52条、その他土坑・柱穴が多数検出され、弥生時代中期後半～平安時代の複合集落遺跡の存在が確認された。

4次調査では中部電力仮設鉄塔建設に伴って発掘調査が行われた。狭小な調査区ではあるが弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡1軒と、その他に溝跡2条・土坑・井戸状遺構等が検出された。

5次調査は民間の開発事業に伴って実施され、溝跡・土坑・小穴群を検出している。帰属時期が特定できる遺構は限られるものの、出土遺物の様相から弥生時代中期後半・後期、古墳時代中期の所産と思われる土坑を確認している。（長野市教育委員会1992・1995・2008）

権現堂遺跡（図3-11）平成10年度～12年度と平成16年度の2次にわたる発掘調査が実施されている。1次調査は天神木遺跡・樋爪遺跡と同じく稲田南土地区画整理事業に起因する。調査区北側は二ツ宮遺跡土地区画整理事業地点に接続する。古墳時代前期の竪穴住居跡2軒・溝跡・土坑、古墳時代後期の竪穴住居跡4軒・溝跡、奈良～平安時代の竪穴住居跡1軒・溝跡・井戸跡・土坑、中世の溝跡・井戸跡・土坑・小穴群が検出された。古墳時代前期の遺構は調査区北端域に、後期以降は南半分に分布しており、調査区中央付近は遺構の分布が希薄である。

2次調査は民間の開発事業に起因する。浅川の氾濫によって埋没した中世の水田跡や畦畔跡、水田下層の自然流路を検出したほか、調査区壁面の土層観察で水田面3面及び畦畔跡が確認された。（長野市教育委員会2004・2005）

参考文献

- 長野市教育委員会1980『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』長野市の埋蔵文化財第9集
- 長野市教育委員会1992『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会1995『二ツ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』長野市の埋蔵文化財第71集
- 長野市教育委員会2004『天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第104集
- 長野市教育委員会2005『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡（2）・吉田古屋敷遺跡（2）・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第108集
- 長野市教育委員会2008『二ツ宮遺跡（3）・浅川端遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第122集
- 長野市教育委員会2016『徳間中南遺跡・徳間番場遺跡』長野市の埋蔵文化財第144集

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査概要

当該発掘地は個人住宅の駐車場等造成事業に伴うもので、調査対象面積72㎡と矮小である。加えて、調査区南部には東西方向に幅1.5mの浸透枡が埋設されており発掘不可能であったことや、調査区東側から北側にかけては擁壁設置による攪乱を受けていたことにより、実質調査面積は36㎡に留まる。

確認された基本層序は第1層:暗褐色土層(盛土層)、第2層:褐灰色土層(耕作土層)、第3層:褐灰色粘土層(水田層)、第4層:黒色土層、第5層:黒褐色または暗褐色土および暗褐色シルト層である。第4層は遺物包含層、第5層は自然堆積層であり、第5層上面が遺構確認面に該当する。

検出された遺構は溝跡1条、土坑3基、小穴19基である。遺構は調査区全域に分布するが、散在的で密集度は低い。土坑・小穴の配置には、規則性・規格性は認められない。出土遺物は破片資料がほとんどで出土量も少なく、遺物から帰属時期を特定できる遺構はない。

また、調査地南側の徳間分譲地造成工事に伴う調査4区において、弥生時代中期後葉から後期の竪穴住居跡が2軒確認されている。今次調査では、その一部やその他の住居跡などの集落の広がりが確認されるものと期待されたが、上記の通り住居跡は検出されなかった。

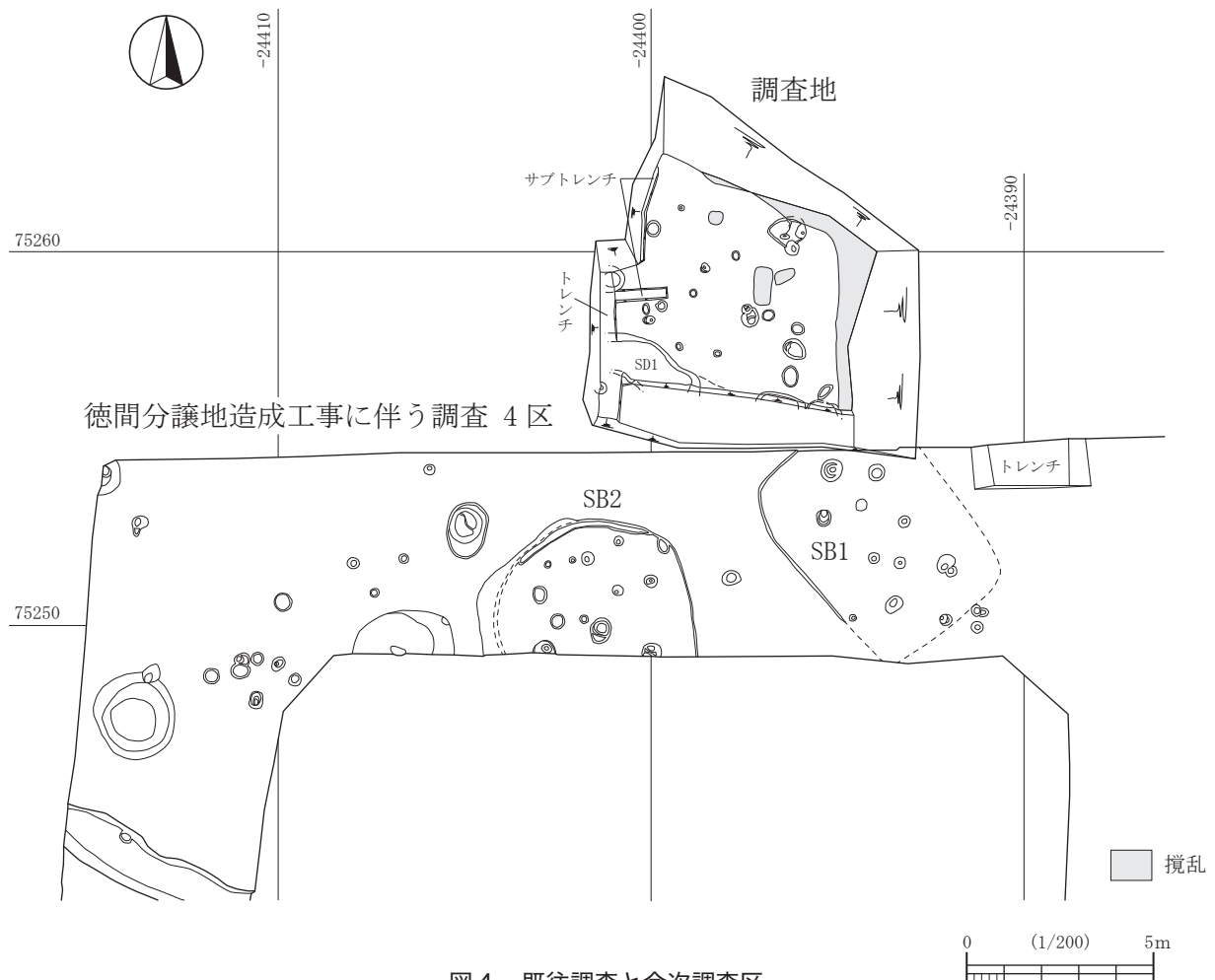
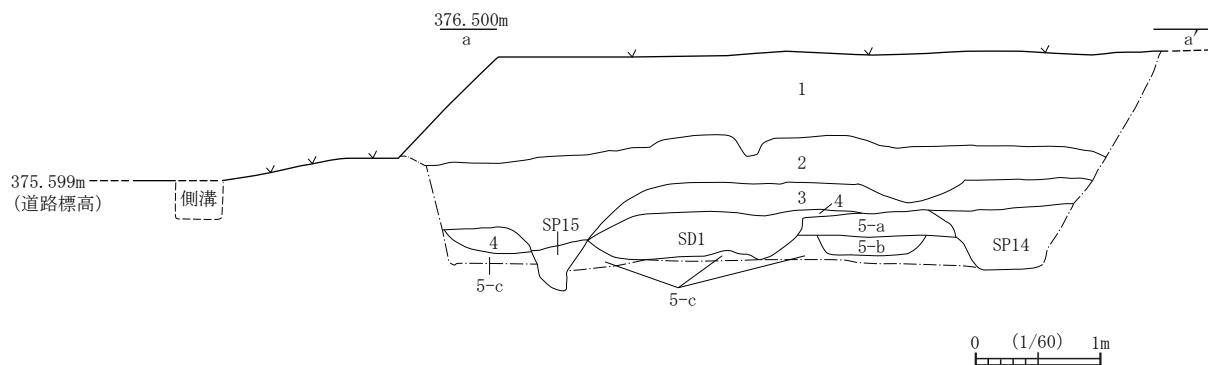


図4 既往調査と今次調査区



図5 遺構分布図



1. 暗褐色土層(盛土層)
2. 褐灰色土層(耕作土層)
3. 褐灰色粘土層(水田層、上部に褐色土粒を多量に含む)
4. 黒色土層(遺物包含層、径5mmほど礫を多量に含む)
- 5-a. 黒褐色土層(自然堆積層、径2~3mm程度の白色粒、礫を含む)
- 5-b. 暗褐色土層(自然堆積層、自然の窪み、礫を多量に含む)
- 5-c. 暗褐色シルト層(自然堆積層)

図6 西壁面土層断面図

第2節 遺構覆土の種類

今回の調査で検出された遺構の覆土は、色調・含有物等の違いからA・B・Cの3種類に分けられる。各種類の内容を以下に示す。

- A : 黒褐色土。やや粘性をもつ。径5~30mm程の礫を微量または少量含む。基本層序に該当する層なし。
- B : 黒色土。やや粘性をもつ。径5~30mm程の礫、白色・褐色の小礫を少量または多量に含む。
基本層序の4層(遺物包含層)に該当する。
- C : 褐灰色粘土。含有物なし。基本層序の3層(水田層)に該当する。

覆土Aについては、壁面の調査では堆積を確認できず、詳細は不明である。ただし、周辺の旧地形が北西から南東に下ることを考慮すると、3層(水田層)形成の際に4層上に堆積していた覆土Aを含む層が削平されている可能性も考えられる。

なお、各遺構の覆土の種類は、遺構一覧表に記した。

第3節 遺構と遺物

(1) 溝跡

1号溝跡 (SD1) (図7)

調査区南西隅で検出された、北西から南東へのびる、幅128cm、深さ9cmほどの溝跡である。断面は逆台形を呈する。

溝跡の南側は、地形が北西から南東に向かって下っており、自然堆積層まで後世の攪乱の影響を受けているため残存しない。

覆土は黒色土で、南東にいくにつれ、礫を多く含む傾向がある。出土遺物はなく、帰属時期の特定はできない。覆土の種類はBに該当する。

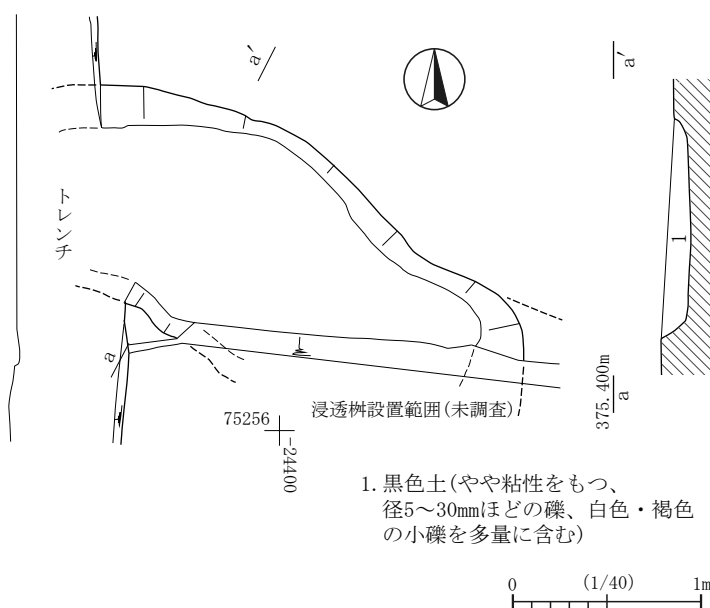


図7 1号溝跡実測図

(2) 土坑

2号土坑 (SK2) (図8)

調査区北西で検出された、長軸104cmの楕円形の土坑である。深さは16cm程度であるが、東側の一部のみ深くなっており、36cmを測る。

出土遺物はなく、時期の特定はできないがSP5を掘り込むことから、SP5よりは新しい遺構である。覆土の種類はAに該当する。

1号土坑 (SK1) (図9)

調査区南東で検出された長軸124cm、深さ17cmを測る土坑である。平面形は楕円形と思われる。南側は浸透枡が埋設されているため未調査である。

出土遺物はなく、帰属時期は特定できない。覆土の種類はBに該当する。

3号土坑 (SK3) (図9)

調査区南東で検出された長軸78cm、深さ8cmを測る土坑である。平面形は楕円形と思われる。

南側は浸透枡が埋設されているため未調査である。

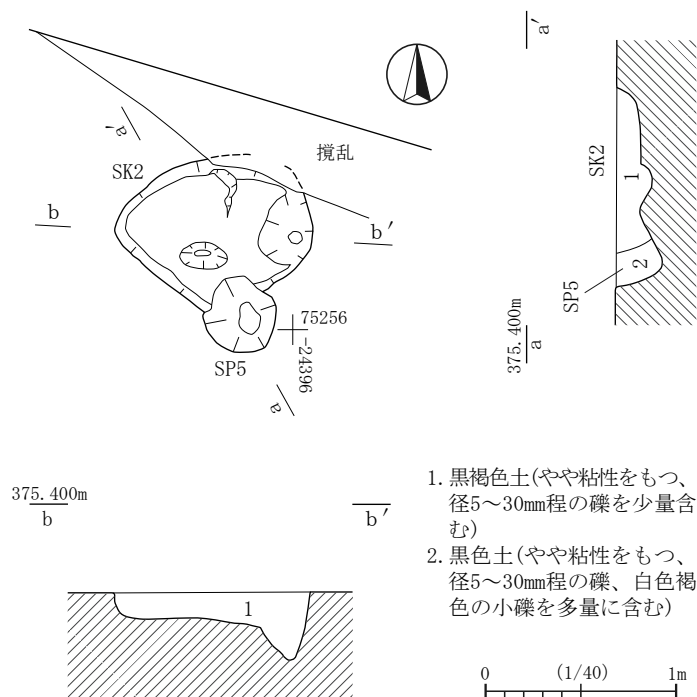


図8 2号土坑実測図

検出位置から、徳間分譲地造成工事に伴う道路部分の調査で検出された竪穴住居跡の一部とも予想されたが、出土遺物の少なさや、該当住居跡の平面形と合致しないことから竪穴住居跡の一部ではなく、別遺構と判断した。

覆土から土師器片が6点出土している。文様等はなく、小片であることから図化はしていない。胎土の様子等から弥生時代中期から古墳時代前期頃のものとして推測される。

遺構の東端は攪乱の影響を受けており、出土遺物もそれによる混入の可能性があるので、出土遺物から本遺構の時期を特定することができない。覆土の種類はBに該当する。

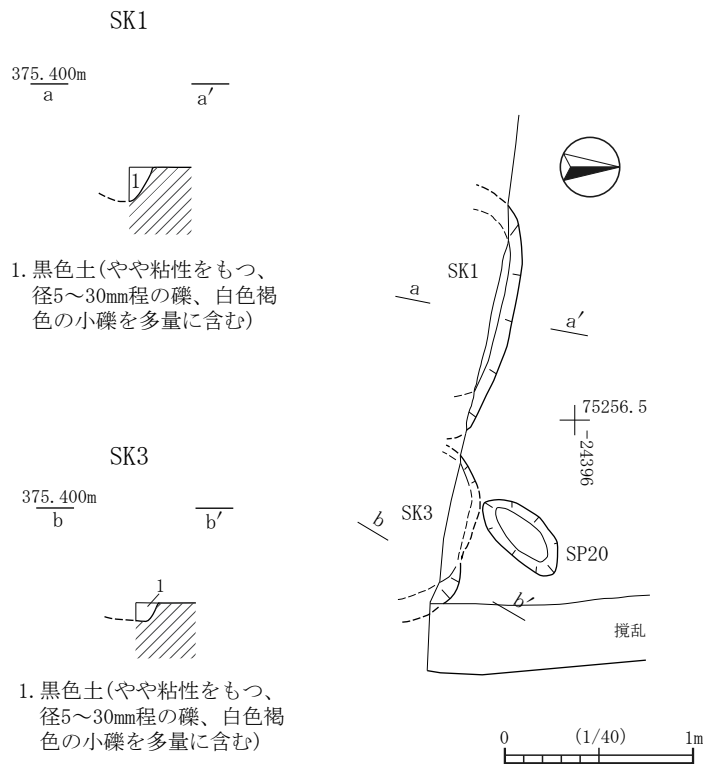


図9 1・3号土坑実測図



1号溝跡(東から)



3号土坑(北から)



調査区全景(北西から)



調査風景

図10 調査写真

表1 出土遺構一覧表

溝跡 < >…推定値

遺構	断面形	規模			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(g)	覆土の種類	備考
		長(cm)	幅(cm)	深(cm)					
SD1	逆台形	266	128	9	—	出土遺物なし	—	B	

土坑

遺構名	平面形	規模			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(g)	覆土の種類	備考
		長(cm)	幅(cm)	深(cm)					
SK1	楕円形?	124	—	17	—	出土遺物なし	—	B	SP6からSK1に変更した。
SK2	楕円形	104	80	36	SP5を切る	出土遺物なし	—	A	
SK3	楕円形?	78	—	8	—	土師器片	38	B	検出時はSBとしたが、調査の過程でSKに変更した。

小穴

遺構	平面形	規模			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(g)	覆土の種類	備考
		長(cm)	幅(cm)	深(cm)					
SP1	楕円形	58	40	7	—	出土遺物なし	—	A	
SP2	楕円形	60	56	13	—	出土遺物なし	—	A	
SP3	円形	38	33	14	—	出土遺物なし	—	A	
SP4	円形	34	30	6	—	出土遺物なし	—	A	
SP5	円形	38	-	22	SK2に切られる	出土遺物なし	—	B	
SP7	円形	24	22	13	—	出土遺物なし	—	B	
SP8	円形	26	24	24	—	出土遺物なし	—	A	
SP9	円形	21	22	6	—	出土遺物なし	—	B	
SP10	円形	31	32	8	—	土器片 1点	2.5	C	
SP11	円形	16	14	7	—	出土遺物なし	—	C	
SP12	不整形	62	46	28	—	出土遺物なし	—	A	
SP13	円形	42	38	12	—	出土遺物なし	—	B	
SP14	円形	<56>	—	16	—	出土遺物なし	—	B	
SP15	円形	<32>	—	14	—	出土遺物なし	—	B	
SP16	円形	18	20	6	—	出土遺物なし	—	C	
SP17	楕円形	22	18	17	—	出土遺物なし	—	—	
SP18	楕円形	34	22	13	—	出土遺物なし	—	B	
SP19	楕円形	30	18	11	—	出土遺物なし	—	B	
SP20	楕円形	52	23	9	—	出土遺物なし	—	B	

(3) 出土遺物 (図 11)

今回の調査では、出土遺物が少なく、小片がほとんどであった。その中でもでき得る限り器形が推測できるものを抽出し実測したが、復元に十分な残存部分を残すものは少なく、半ば強制的に復元し計測していることをご理解頂きたい。

調査地全域での土器の総量は 265 g である。弥生時代中期から中世までの遺物が出土している。出土土器の大半は遺物包含層からの出土であり、遺構に伴う遺物は皆無に等しい。

1 は弥生時代中期の壺の胴部と考えられる。外面に弥生時代中期の文様に特徴的な沈線が認められる。2 は古墳時代前期頃と思われる二重口縁壺の口縁部である。3 は西壁の 4 層上面で出土した中世の白磁片である。体部下半から高台にかけて外面が露胎している。高台は外面を斜めに削り出す削出高台である。高台の器形と底径の大きさから、森田勉が白磁を分類し作成した編年(森田 1982)の、D 群に属する皿と考えられる。3 の時期は D 群の出土年代を考慮して、14 世紀後半から 16 世紀代と推定される。4 は中世の内耳鍋と考えられる。

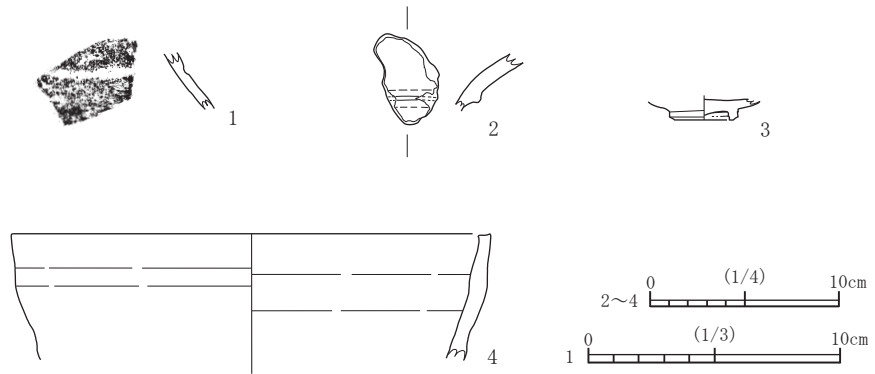


図 11 出土遺物実測図

参考文献

森田勉 1982 「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2

表 2 出土遺物観察表

No.	出土位置	種別	器種	部位	法 量 (cm)			遺存度	成 形 ・ 調 整 等	
					口 径	底 径	器 高		成 形 ・ 調 整 等	
									外 面	内 面
1	包含層	弥生土器	壺	胴部	—	—	—	沈線	ナデ	
2	検出面	土師器	二重口縁壺	口縁部	—	—	(3.8)	化粧土あり、横ナデ、一部磨耗	横ハケわずかに残る	
3	包含層	白磁	皿	底部	—	3.1	(1.0)	ケズリ、体部施釉、底部露胎	施釉	
4	包含層	土師器	内耳鍋	口縁部	<25.4>	—	(6.5)	口唇部面取り、口縁部から体部ロクロナデ、一部剥離	ロクロナデ	



図 12 遺物写真

第IV章 まとめ

今回の調査では溝跡1条、土坑3基、小穴19基を検出し、各遺構の覆土はA・B・Cの3種類に分かれることを確認した。Bは基本層序第4層の遺物包含層に相当し、Cは基本層序第3層の水田層に相当する。Aに該当する層は壁面では確認できなかったが、Aを覆土とするSK2がBを覆土とするSP5を掘り込む状況からAはBより後に堆積した土であると考えられる。このことから、古い順にB→A→Cと並べることができる。

各覆土が堆積した時期については、遺物の少なさや遺構の希薄さから特定することは難しい。あえて時期の推測をすれば、先述の白磁片（図11-3）が第4層上面で出土していることからCは中世以降の堆積である可能性が高い。Bは、今次調査と既往の調査で出土している土器の傾向等から弥生時代中期から古墳時代前期の期間に堆積した土と推測される。Aは、Bの堆積後Cが堆積するまでの、古墳時代前期以降から中世までの期間に堆積したと考えられる。

また、本調査地を含む徳間番場遺跡でこれまでに確認された住居跡は、既往の調査で見つかった2軒のみであり、集落の中心部は本調査地より北側に展開すると思われる。これまでの調査は結果的に集落外縁部の調査とも言え、今後集落の中心に対して調査が実施される際には、それらを補完する重要な資料となり得るだろう。

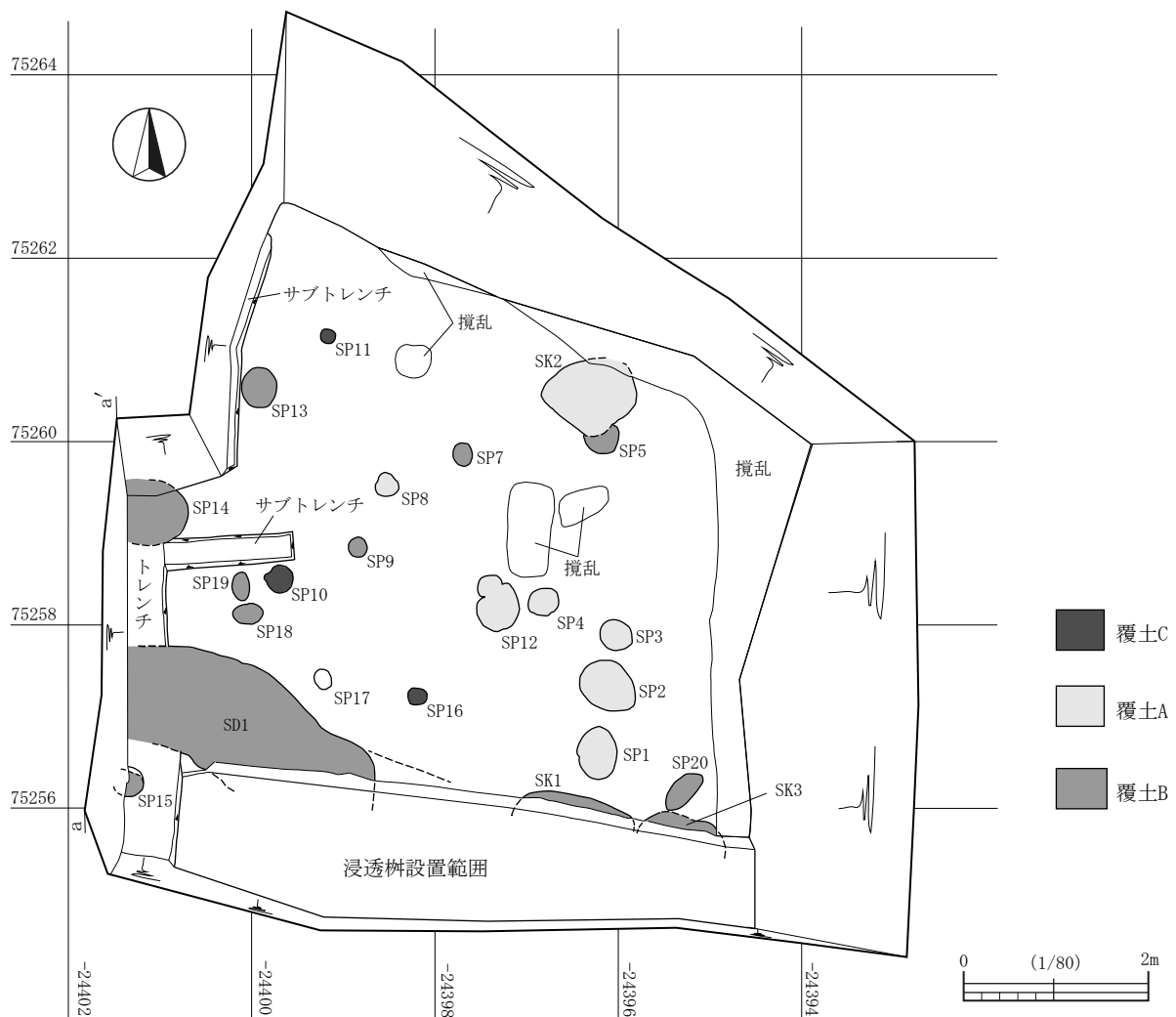


図13 覆土別遺構分布図

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん なかごえいせき 2 ・ とくまばんばいせき 2							
書名	浅川扇状地遺跡群 中越遺跡(2) ・ 徳間番場遺跡(2)							
副書名	中越一丁目ブレインマンション新築工事 および 東邦ピュアタウン徳間 3 号地駐車場等造成工事 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第 148 集							
編集者名	清水竜太・高津希望・篠井ちひろ・飯島哲也							
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004 ・ FAX 026-284-0106							
発行年月日	2017 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あさかわせんじょうちいせきぐん 浅川扇状地遺跡群 なかごえいせき 中越遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 なかごえいっちょうめ 中越一丁目 ばん 221 番 2 外	20201	A-502	36°	138°	20160530	293 m ²	マンション 建設
				39′	13′	～		
				43″	10″	20160627		
あさかわせんじょうちいせきぐん 浅川扇状地遺跡群 とくまばんばいせき 徳間番場遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 おおあざとくまあざばんば 大字徳間字番場 545 - 8	20201	A-019	36°	138°	20160829	36 m ²	駐車場 造成
				40′	13′	～		
				41″	37″	20160907		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中越遺跡	集落跡	弥生時代中期後半	竪穴住居跡	1 軒	弥生土器		焼失住居	
		弥生時代後期後半	土坑	2 基	半珠状勾玉			
		奈良時代	溝跡	3 条	土師器・須恵器・石製品			
		古墳時代後期 平安時代・中近世			土師器・須恵器・内耳土鍋			
		時期不明	掘立柱建物	4 棟				
			土坑	8 基				
			溝跡	1 条				
			小穴	32 基				
徳間番場遺跡	集落跡	弥生時代中期 ～中世	溝跡	1 条	弥生土器			
			土坑	3 基	土師器			
			小穴	19 基	陶磁器			
要 旨	中越遺跡	中越遺跡は、浅川扇状地の扇端部に位置する弥生時代中期から中近世にかけての集落遺跡で、かつては「北長野貨物駅遺跡」「国鉄貨物基地遺跡」と呼称されていた。今回の調査では、弥生時代中期・弥生時代後期・奈良時代の遺構を確認した。弥生時代の住居跡はいずれも焼失住居で、弥生時代中期の住居跡からは半珠状勾玉が出土した。						
	徳間番場遺跡	徳間番場遺跡は浅川扇状地の扇央に位置する集落遺跡である。平成 27 年度に行われた発掘調査では、調査地北端の道路部分で弥生時代の住居跡を 2 軒検出しており、集落はこれより北側に展開するものと予想された。本調査地は 27 年度調査地北端道路部分の北側に隣接する。住居跡は発見されなかったものの、溝跡や土坑が確認されており、集落の外縁部であることがうかがわれる。						

長野市の埋蔵文化財第 148 集

浅川扇状地遺跡群

中越遺跡(2)
徳間番場遺跡(2)

平成 29 年 3 月 25 日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 有限会社アツツーロ